
異説、ドイツ栄光の階段

橘花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異説、ドイツ栄光の階段

【Nコード】

N3528V

【作者名】

橘花

【あらすじ】

フンボルト大学ベルリンを卒業した一人の青年は、ドイツの今の現状が正しいのかを疑問に思う。そんな時、見ず知らずの声に導かれ、彼が行った世界は。

史実からかなりかけ離れる事や、現実的にありえない事など多数あります。

プロローグ（前書き）

正直、太平洋戦線でのネタが尽きて、今度は欧州に手を出しました。あらすじに書いた通り、現実的にありえない事があります。主人公の副官が〇ル〇だったり。

プロローグ

―フンボルト大学ベルリン―

「諸君らの栄光は、ドイツ国家の歴史に永久に刻まれることとなるでしょう。」

学長が挨拶を行い、卒業式が終わる。

「なあ、エーベルト。お前は卒業したら何になりたいんだっけ？」

「まあ、歴史学者でも目指すよ。」

フリードリヒ・エーベルトは、自ら立ち上げた戦史研究会の部室を掃除しながら言う。

「そうか。お前って第一哲学部だったもんな。それに、入学早々の歴史の授業で先生を論破したって話、今でも有名だぞ。」

「やめてくれよ。あん時はクラス中に注目されて恥ずかしかったんだから。」

「俺らだって驚いたよ。」

「ははは、まあこれで俺らは卒業だな。」

「ああ。元気でやれよ。」

そう言って戦史研究会の友人と握手を交わし、部屋を出た。

―自宅―

エーベルトの自宅は周りが緑に囲まれた自然豊か、悪く言えば田舎からベルリンにある大学まで通っていた。ベルリン市内に部屋を借りるよう親が進めたが、自然を見ながら大学に行きたいと言って聞かず、結局在学中毎日自宅から通った。

「卒業おめでどうフリードリヒ。」

親は息子の卒業を心底喜んだ。家庭的な事情で両親共に大学卒業はしておらず、田舎の小さな工場で製品の設計に務め、母は農業を営んでいる。

「ありがとう母さん。大学へ通うお金を出してくれて。」

田舎で、貧しいって程ではないが、それでも経済的に苦しく、大学へ通えないのでは心配していたが、無事に大学を卒業することが出来てフリードリヒは感謝している。

「何を言っている。父さんたちが行けなかった大学だ。それを息子が大学を卒業してくれてありがたいぞ。」

「ふう。」

帰ってくるなり、戦史研究会を立ち上げた時から続けている恒例の

兵器設計を始める。父が製品の設計を昔からしており、その設計図を見て育ったフリードリヒにとって、趣味の兵器調べが行き過ぎて兵器設計になってしまっていた。

「こんなもんでいいかね？」

設計中の？号戦車、タイガー戦車で有名な戦車をモデルに改良を加えて設計した新？号戦車と名付けた。それが、書き終える。

『なかなかいい出来前ねえ。』

突然、自分しかいない筈の部屋から声が聞こえてきた。

「誰だ!？」

しかし、返事は無く。

『それが実際に暴れたら、ドイツはどうなったんだろうね?』

「誰だか知らないが、もうドイツは戦争へは関わらない。」

『この国が戦争をしていた時期。それも、戦車がまだ黎明期の第一次世界大戦では・・・実用化は無理ね。でも、その時から技術開拓をしていれば?あるいは。』

「誰だか知らないが、過去に戻せれるとでもいうのか？」

『ええ。貴方が活躍できるよう、色々と歴史に細工をしてあげます。行ってみてください。あなたの考えた兵器が、何処まで通用するか?』

「な!？」

目の前が真っ白になり、続いて物凄い衝撃が走る。そして、気を失った。

―欧州大戦（俗言う第一次世界大戦）終結間際のドイツ―

「こ、ここは？」

自分が居るのは戦場のど真ん中。砲撃が次々と飛んでくる。

「おい、何をしているんです!!早くこっちへ。」

と、突然大声で呼ばれ、フリードリヒは急いで呼んだ者が隠れている塹壕へ入った。

「戦場のど真ん中で止まっているとは度胸がありますね。」

「君は？」

「自分ですか？自分はアドルフ・ヒトラー伍長であります。」

それに驚いた。ヒトラー、ドイツ人にとってこれ以上の複雑な人物は居ないだろう。20世紀の悪魔とも今では言われている程だ。

「アドルフ伍長？」

「そう言う中尉殿は、何処の連隊の者で？」

答えに困っていたその時、鐘がなった。

『マスタードガスだ！！、全員、防毒マスクをしろ！！』

それを聞き、急いでガスマスクを着け、そして思った。

（ここは第一次大戦の1918年、10月15日だ。）

実際、この日アドルフ・ヒトラーはマスタードガスに遭われ、視力を一時的に失っている。

案の定

「おい、ヒトラー伍長。確りしろ！！。おい！！。」

幾ら後世の独裁者とは言え、今は一の兵士に過ぎない。それに、傷っているなら救うのが人間として当然だろう。

何とか担ぎ上げ、おんぶの状態で野戦病院までヒトラーを運んだのだった。

闘争

―野戦病院―

「触らない方がいい。」

療養しているヒトラーは包帯を取ろうとした所をフリードリヒが止める。

「医者が言うには失明する可能性がある。今はそっとしておけ。」

「ちゅ、中尉殿。戦場は？我がドイツ帝国は勝ち続けていますよね？」

ヒトラーはフリードリヒの両肩を掴んでくる。フリードリヒは迷った。今日は事実上終戦の日。11月11日なのだから。

「心配するな。もうじき、終結する。」

「じゃあ、我がドイツ帝国は勝利しますよね？」

これにも回答が迷った。そこへ、医者が入ってきて。

「おい聞いてくれ。たった今、軍上層部並びに中央政府は降伏することが決定したそうだ。」

「我々ドイツが負けたのか。」

治療を受けている他の軍人たちは皆、複雑な感情だった。終結を素

直に喜べない。それを聞き、ヒトラーは愕然とする。そして、

「ドイツが・・・負けた・・・だど？」

頭に巻いている包帯を思いっきり握りしめ、引き千切る。

「お、おいよせ！。失明するぞ！」

フリードリヒは止めようとするが

「200万の兵の死も・・・全て、全て無駄だったとでも言うのか！
！」

「ちょ、君、やめなさい。」

「失明するぞ。」

他の兵隊や医者が止めようとするが、ヒトラーは構わずに目を掴む。

「祖国の不幸に比べれば・・・失明の苦悩など、取るに足らん！！」

その場に居る全員が騒然とする。フリードリヒはそれを見届け、野戦病院を後にした。

その後、ドイツはベルサイユ条約に調印。軍備は抑えられ、領土の一部と植民地全てを失い、戦争で破綻した経済に拍車がかかるような、当時のドイツに払えるはずもない莫大な賠償金が課される。政府はそれを何とかするために金を刷り、それが原因で更に経済が混

乱。マルクは、紙切れ同然となった。

―ケルン郊外―

「諸君らに集まってもらったのは他でもない。」

フリードリヒはパリ講和会議の最中に軍を除隊。その後、軍人や兵器開発者などの専門の人を密かに集め、勉強会の名目で集会を開いた。

「マルクは紙切れ同然となり、ドイツは全てを失った。このままでは、もう一度大きな戦争が起こる。そうなれば、我がドイツは真先に敗北するだろう。」

フリードリヒはそう切り始める。ベルサイユ条約は軍人などでも多数の不满があり、軍艦なども多数が引き渡されるのを拒否して自沈の道を歩んでいる。

「奴らは、我がドイツに莫大な量の賠償金を課し、ドイツを滅亡させようとしている。我々は、これを黙って見過ごしていいものか？ どうだ。」

フリードリヒは全員に問う。

「見過ごせない。」

「そうだ！ そうだ！」

案の定の答えが返ってきた。

「そこで、アイゼハナ車両製作所は、これを生産してもらいたい。但し、地下工場でな。」

既に、ドイツ地下には大量の地下兵器工場が極秘に作られており、そこを何社かの組に分け、地下にて兵器増産を開始した。

「?号戦車?それにしては砲塔がありませんな。」

「あくまでも、訓練戦車です。」

「では、本命は?」

「これです。」

「?号戦車?今度は機関砲とは。」

「そして、戦車の原型となるこれ。」

「?号戦車。やっと、主砲が搭載されましたか。」

「その他の各社にも、後程設計図を送ります。ある程度の生産が出来たら次のも送ります。」

その他にも航空機のエンジン等の設計図と航空機の設計図を各社に送った。この後の歴史で、航空機メーカーを作る人や、戦車などの兵器を生産することになる人にも勉強会に参加してもらっている。

「ハインケルさんにはこれを。」

渡したのはhe70とhe111の設計図だった。

今回渡した全ての設計図は後知恵も盛り込まれている。戦車は後のソ連戦車並みに幅広で設置圧の低い履帯や傾斜装甲、高速移動にも適した大型の転輪。それに、部品数と工程を減らす工夫も航空機と戦車には盛り込まれている。

設定上、自分の家とされている自宅に帰り、ベッドに寝っ転がる。

「どうして、タイムスリップなんか。あの声は一体なんだったんだ？」

自分でも分からなかった。何で突然タイムスリップをしたのかを。

「まあ、現実の意味を求めても無駄か。」

そう考え、眠った。

次の日からは忙しかった。地下工場で早速戦車生産や航空機生産が始まっている。

「航空機は民間機、戦車は農業用トラクターの名目でそれぞれ生産しています。」

史実通りの名目だった。生産時期は史実よりも大幅に早い。

「外国から戦車や戦闘機を輸入して調べましたが、単発機でした

つけ？この飛行機の性能は卓越しています。」

試作一号機が早くも完成したメッサーシュミットBF109は早速飛行試験を行っている。

「駄目だ。追いつけない。」

D. ?を軽々振り切るBF109はその性能の高さを示す。

「エンジン出力が計画値の示すにはもう少し掛かりますが、残存エンジンの300馬力を搭載してこの性能です。素晴らしい。」

時速は320?を記録している。最終的には690?まで速度を上せたいため、まだまだエンジンが期待通りの性能を示していない。

「もう少し改良の余地がある。エンジンを早急に開発させないと、こんなスピードでは戦えない。」

「え？在来機のどれを相手でも振り切れる機体ですよ。十分では？」

「いや、今度は恐らく航空機がどんどん発展していく。こんなスピードが通じるのは、今だけだ。」

「分かりました。エンジンの開発も全力を尽くさせます。」

強計画

1924年 4月10日

―ニユルンベルク―

「エーベルトさん、貴方の指示していたノルウェー北部に秘密ドックが建造されました。」

「そうか。」

エーベルトは地下工場だけでなく、秘密のドックも建造を指示している。15万ト級ドック×2、6万ト級ドック×3、4万ト級ドック×5と言うドック数だった。

「そこに、これを建造指示させよ。」

「これは？」

「大型戦艦と大型空母。それに、中型空母だ。」

「しかし、スウェーデンの鉄鋼とアメリカの鉄鋼だけではかなりの年数が掛かりますが。」

「心配するな。スウェーデンにサルベージ船がある。それを使って、自沈した軍艦を引き上げ、還元して使えば良い。それに、もうじきアメリカからの鉄鋼を大量に輸入できるチャンスが来る。」

世界恐慌が起これば、アメリカの製鉄産業も衰退を始める。儲けた

い製鉄産業と政府は、買ってくれる相手ならバンバン輸出するため、そこを狙って大量に輸入するのだ。

「それと、ミュンヘン方面で一一揆が起こり、国家社会主義ドイツ労働者党党員が逮捕された事件で、首謀者のヒトラーがランツベルク要塞刑務所に」

「労働者党が？」

「はい。」

正直、ヒトラーの独壇裁判を見たかったが、仕方がない。エーベルトは立ち上がり。

「車を用意しろ。ランツベルク要塞刑務所へ出せ。」

表に車が用意され、それに乗ってバイエルン州ランツベルク要塞刑務所に向かった。

ーランツベルク要塞刑務所ー

「久しぶりだなヒトラー伍長。」

「あ、貴方は。」

「エーベルト中尉だ。つと言っても、今は退役して、兵器産業省を立ち上げている。」

「そうですか。今、ドイツは衰退しきっている。政府は敵の為に紙幣を印刷し、近頃はパン一つに800万と言う莫大な値段が付けられている。おまけに、街中では失業者が大勢いる始末だ。」

「ヘス君は元気かね？」

「今は口述筆記中だ。」

「『嘘と臆病、愚かさに対する4年半』（後の『我が闘争』）ですか？」

「はい。何故、知っているんです？」

「そんな事より、その題名は長いと思いますよ。」

「では、どんな題名が良いかね？」

「そうですね、貴方の人生を闘争と置き換え、『我が闘争』なんてどうでしょうか？」

「『我が闘争か』。中々面白い題名だな。」

「では、私はまだやらねばならないことがあるので。そうそう、裁判での演説、見事だったよ。」

自らを全ての責任者とし、弁解を行わず、国民の権利を守るために戦った罪で有罪と言った。この演説に、判事までもヒトラーに共感したほどだ。

「見に来ていたんですね？」

「ああ。」

そう言って面会室を出て、外に待たせている車に乗った。

「アウンツァー君、勉強会本部へ。」

「はい。」

その後、世界は歴史通りに動いた。世界恐慌がアメリカで発生し、世界経済の中心を担っていたアメリカの経済は混乱。瞬く間に世界に波及した。ただ一つ、共産大国ソ連を除いて。

ヒトラーは再び政界へと復帰し、ナチス党勢力を拡大。ナチス党大会の最中、ニュルンベルク法を制定してユダヤ人が市民権などを剥奪。ベルサイユ条約を史実よりも早い1934年に破棄して再軍備を開始し、国防軍強化と空軍の存在をナチス党大会でアピールした。

「自己をあらゆる武器で守ろうとしない制度は、事実上自己を放棄している。」

ヒトラーは空軍の存在や国防軍強化を表明した時に言った。

1938年 6月10日

―ニュルンベルク―

「エーベルトさん。ヒトラー總統の使いと名乗る突撃隊が。」

「分かった。通したまえ。」

使いはエーベルトの部屋に入り、

「エーベルトさん。總統がお呼びです。我々のご同行願います。」

「一体、何の用かね？」

「ご同行を。」

ただ、突撃隊員はそれしか言わない。

「分かった。支度をするから、外で待っとけ。」

―總統官邸―

「私を呼び出して、何の用かね？」

總統官邸に連れて来られたエーベルトは執務室の椅子に座る。

「フリードリヒ君。君は、国防軍とは別に、兵器生産をしていたようだ。しかも、空軍を持つ前から、戦闘機や爆撃機、輸送機まで

生産している。」

「それが？」

「本来なら、国家反逆罪で逮捕されている。しかし、君には第一次大戦で命を救われている恩がある。その恩に免じ、生産した兵器を全て、こちらに提供する条件で君の罪は問わない。」

「総統、ならもう一つ条件がある。私を、国防軍大将に任命しろ。」

「貴様、総統に向かって。」

後ろに控えているヒムラーは言ってくるが、ヒトラーは手で制止させ

「良からう。君は第一次大戦で中尉の階級を持っている。大将位なら十分だろう。」

「では、交渉成立だな。」

「して、どの位の兵器生産を？」

「全て、そちらの保有する兵器を越えている。質、数共に。」

エーベルトはキール軍港に総統やナチス高官らと共に向かった。

「そろそろ総統が私を呼びに来るだろうと思い、今日艦艇や兵器、航空機がここに集結することになっています。貴方は、今まで見たことも無く、ドイツの偉大さを改めて実感することになるでしょう。」

」

暫くし、巨大な戦艦や空母などの海軍艦艇。並びに、空を埋め尽くさんばかりの航空機、地上を走る戦車などの装甲車両、軍用車両が到着する。

「す、素晴らしい。」

ヒトラーはただ称賛する事しか出来なかった。ドイツでは少数しか居ない水上艦艇もこれで強化されるし、空母があれば洋上での補給も出来る。

「この戦車は、我が軍の装備する履帯よりも広いではないか。」

戦車は全て履帯を広くし、その他の軍用車両でも一部は履帯を張っている。バイクでも、履帯を装備している程だ。ソ連の整備されていない土地に車輪では不向きだし、粘りつく泥やぬかるむ土で進行が大幅に遅くなるため、それを防ぐために履帯を装備している。

「さーて、これで望みの兵器提供は済みました。後は、こちらの要求した国防軍大将に任命してください。」

「よからう。本日を持ち、フリードリヒ・エーベルトを、国防軍大将に任命する。」

「感謝します。総統。」

敬礼をし、国防軍大将階級付制服を着て、国防軍へと入隊した。

出会いと開戦

入隊をしたエーベルトは部下となる兵士に挨拶を終え、自宅へと戻った。

「疲れたな、正直総統がこんなにあっさりと許可を出すとは。」

戦車や航空機など、預けた兵器で訓練を始めた兵士は、これまで乗ったことも無い兵器を見て驚いている。

「ん？」

脇道の林に、光が見える。

「何だろう。」

車を止め、ワルサーP38を抜いて奥に入っていく。

「あれは？」

そこには、ドイツ国防軍の制服と帽子を被った女性が居た。

「何をやっている？お前は、何者だ？」

「きゃ！」

その女性はビクリしてその場に倒れた。その拍子に、被っていた帽子が落ちてエーベルトは驚く。

「お、お前、エルフか？」

長く尖った耳を持つ、エルフだった。

「馬鹿な、あれは神話の筈だ。」

「それでも、私は存在している。エーベルトさん。」

突然、そのエルフは立ち上がってエーベルトの名を呼ぶ。

「何故、名前を？」

「あら、この声に聞き覚えは『なかなかいい出来ねえ。』。」

「!!。お、前は。まさか。」

「そのまさかだよ。この世界に貴方を呼んだのは私。エルフは魔法を使えるって、習わなかった？」

「魔法が存在すること自体知らないよ。」

エーベルトは少し後ずさる。しかし、そのエルフ女性はエーベルトが後ずさった分だけ前に来る。

「心配しないで。私も、ドイツ国防軍所属で、しかも貴方の副官ってことにしたから。」

「何!？」

驚き、更に後ずさった。しかし、またしても距離を詰めてくる。

「そろそろ、その銃を下してくれない？銃口を向けられているのはいい気分じゃないから。」

「わ、分かった。」

エーベルトはゆっくりとワルサーを下し、ホルスターへ収める。

「どういう事だ？何故、この世界に呼び寄せた？」

「貴方は兵器を自室で設計していたからね。その貴方に来てもらったの。知ってるでしょう？この後に起こる、世界大戦を。」

「ああ。」

「敗北し、ドイツの女性がソ連兵士に犯されたことも？」

「ああ。歴史で学んだ。」

「そう。私は、それが嫌で貴方にここへ来てもらったの。戦争は回避できない。第一次世界大戦で、負けたあの時からこの大戦は回避不可能だった。だから、少しでも良い終り方が出来る様、未来から優秀な人間を呼んだの。」

「そうか。」

「そして、私も勝手ながら貴方の副官って事にしたの。私には、責任があるから。貴方が、どうやっていくのか、見届ける責任が。」

「分かった。事情も。あと、少ししたら開戦だ。」

1939年 9月1日 未明

―総統官邸―

「神は私にお告げになられた。全軍に布告せよ！！、ポーランド侵攻開始！！」

―ポーランド国境線―

「エーベルト大将。総司令部より、ポーランド侵攻を開始せよとの命令です。」

「分かった。」

そう言って自らの戦車、？号戦車レオパルドに乗り、

「国境ゲートを開けよ。総員、ワルシャワを陥落させるぞ。」

ドイツ戦車軍団を先頭に、ポーランド国境を各方面で突破。幾つかの国境線では抵抗を受けたが、戦争準備の整っていないポーランドに抵抗を持続させる力は無く、直ぐに突破を許した。

「後方は歩兵部隊に任せよ。戦車隊はただ敵中を突破し、ワルシャ

ワへと目指す。」

開始から順調なスタートを切った。ポーランド軍は各地で敗走し、首都目指して撤退していく。

「前方に装甲車、撃て。」

レオパルドの127mm砲はwz29装甲車を破壊し、更に突き進む。

「空軍のシュトゥーカです。」

見ると、18機のシュトゥーカが3個編隊で飛行しており、それは前方のヴィエルニを爆撃している。

「あそこには戦車部隊が居ます。」

見ると、ヴィエルニに7TPが居る。

「歩兵部隊は？」

「後方28?地点に居ます。」

「何故そんなに遅い?。」

「交戦中の模様です。」

「?、?号戦車は何をやっている!?。」

歩兵部隊には?、?号戦車を配備し、少数だが?号戦車お入ってい

る。しかし、それでも歩兵との勝負は十分の筈だった。

「それが、敵は塹壕に隠れて撃っているようでして、反撃が。」

「戦車をつっ込ませろ。何のための戦車だ!!」

「は、そう命じます。」

その時、車体に衝撃が走り、揺れる。

「どうした?」

「左側面より砲撃。ヴィッカーズ6トン戦車です。」

「砲塔、左70°。ヴィッカーズ6トン戦車を狙え。」

砲塔が旋回を始め、ヴィッカーズ6トン戦車に狙いを定める。

「撃て!!」

命中した砲弾はヴィッカーズ6トン戦車の装甲を貫通し、内部にて爆発する。

「勝てるぞ。突っ込め!!」

しかし、ヴィエルニでの戦闘が予想以上に手こずる事は、この時、誰も予想していなかった。

市街戦

―ヴィエルニ 市街前―

「そういえば、海軍のバルト海封鎖は完了したか？」

バルト海封鎖はエーベルトは海軍長官のエアリヒ・レーダー元帥に総統経由で命じておいた事だった。

「まだ、完了はしていませんが、既にその様に動いているとの事。」

「分かった。」

市街地に？号戦車を戦闘に突入していく。

「各車に、周囲に気を付けろ伝えろ。戦車では見晴らしが悪いからな。」

「了解。」

戦車での市街戦は視界の狭い為、非常に不利なのだ、しかし、ここを占領して一旦補給を受けないと？号戦車は動けなくなってしまう。

「！、上方より歩兵だ！！」

しかし、建物に隠れていた歩兵は爆弾を投下。一番前を走る？号戦車にその爆弾がくっ付き、爆発。破壊された。

「畜生。」

砲身を上に向け、

「撃て！」

127mm砲を再び身を隠した歩兵に向けて放った。隠れていた場所
は吹き飛び、先ほど爆弾を投下した歩兵が落ちてきた。

「バックしろ。」

しかし、再び爆発が起こった。

「どうした？」

「突入した戦車20台の内、前方の戦車はたった今破壊され、最後
尾の？号戦車との通信も途絶えました。」

「何だと！？では、我々は袋のネズミではないか。」

一本道しかない道路で、先頭車と最後尾車が破壊された為、身動き
が完全に取りれなくなってしまった。

「野砲が後方車に向かって砲撃。」

「装甲が固い。破壊されることは無い。」

前方では先ほど破壊された？号戦車が炎上しており、その前から野
砲が現れる。

「ハッチ閉じ。何かに？まれ。」

急いでハッチを閉じ、乗員は手近な物に？まる。その瞬間、衝撃が走った。

「いい気になりやがって。」

運転手に変われと要求し、エーベルトが運転席に座る。

「無線手、後続車に続けと命じろ。」

アクセルを踏み込み、燃えている？号戦車に体当たりして退かした。

「野砲を踏み潰す。機銃手、野砲から逃げる砲兵を撃ちまくってやれ。」

「司令、歩兵も反対側から市街地に突入。市街戦が起こっています。」

「こっちも手一杯だ。前方より、7TPが8台。」

野砲を踏み潰し、前進していると7TPが姿を現す。

「各車、散開。通りを蹂躪して占領する。建物を破壊しても構わん。」

残った18台がそれぞれ散開し、分散した7TPを各個撃破する。

「目標、7TP戦車。砲手、一発で当てろ。」

主砲を7TPに向け、発射した。

「よくやった、命中だ。」

破壊された7TPは無残にも砲塔が吹っ飛び、不格好な形になってしまった。

「占領だ。」

ここまで来るのに、?・?号戦車合計8台、?号戦車6台、?号戦車3台を損失。歩兵は途中で5千人程度。しかし、市街戦で8千人が戦死していた。

夜になり、各方面からの戦闘集計がもたらされた。

「はい、司令官さん。」

「全く、どうやって女性が、しかもエルフが軍に入れたんだよ。採用した奴の顔が見たい。」

本当にエーベルトの副官になってしまったエルフはその日の戦闘詳細がびっしりと記入された報告書を持つてくる。

「そういや、まだ名前を聞いてなかったな。」

「私の事はディエ・シェーネ・ヴェルトって呼んで。」

「美しい世界か。じゃあ、ディエでいいか?」

「ええ。階級は中尉です。」

「じゃあ、ディエ中尉。退室してよろしい。」

「はい、司令官。」

敬礼をし、部屋を出ていく。

「各方面でも予想以上の反撃を受けたんだな。」

西部方面は完全に占領したが、損害は史実よりも多かった。

「こりゃ、マジでベルサイユ条約破棄前から戦車とか生産しといて良かったな。」

？・？号戦車の損害は歩兵支援の筈なのに異様に多く、？・？号戦車はそれなりの損害は受けている。？・？号戦車はポーランド戦には投入せず、十分な数を揃えてフランス戦に主力として投入されることになっていた。？・？号戦車はポーランド戦におよそ70台が参加しており、？号戦車が一台、車輪を破壊されて擱座となり、戦車回収車にて本国へ移送された。

航空機は戦闘機36機が空戦で損失。相手の損害は126機（恐らくは過大戦果）と記録されている。対空砲で8機が撃墜、洋上に出た1機が行方不明。爆撃機は戦闘機によって40機損失、対空砲で12機損失、着陸ミスで3機損失。爆撃による地上撃破が航空機300機以上、戦車他車両100台以上と記入されている。

（航空機の損害が多いのは仕方がない。史実ではポーランド空軍の

エース級の奴らは全て逃げているのだから。そして、バトル・オブ・ブリテンで戦果を挙げている。しかし、史実よりも多くの航空機を運用し、脱出する前に空域封鎖を行えば、連中は脱出できずに戦うしか無い。だから、損害は増えるが、後を思えば楽になる。空軍にはもう少し頑張ってもらおう。」

明日からワルシャワへ本格的に空襲を開始する。急降下爆撃隊は引き続き機甲師団の進撃を掩護するが、水平爆撃隊は都市部への爆撃が主任務とされる。

（ソ連の侵攻は、独ソ不可侵条約無締結のこの世界にあり得ない。）

この世界では、まだ独ソ不可侵条約は締結されていないのだ。その代り、色々と策略が練られている。

（総統、ポーランド占領後に三国同盟を一時凍結をし、独ソ同盟を締結。密約に添って日本がソ連に侵攻し、ソ連を支援するとの名目でソ連領内に侵入。油田を始めとする地点を確保したら、独ソ同盟破棄、三国同盟復活でソ連を占領。絶対に果たしてくださいよ。）

既に歴史を知っているエーベルトのにとって、先を読むのは容易かった。ポーランドを占領すれば、東部を分割しろと言ってくるソ連に対し、分割を条件に独ソ同盟を締結させる目的があった。そして、強計画で建造された20隻の輸送潜水艦の内の5隻で、30台の？号戦車を日本へ送る。それを使ってソ連侵攻を開始。ソ連を支援するという名目で油田などの地点を確保した後、破棄してソ連侵攻。ある意味、卑怯な手でもあった。

（明日、ワルシャワを落とす。）

しかし、エーベルトにとって社会主義は許す事のできない主義だった。それに、個人的にスターリンを嫌っている。そして、それに加担したイギリスとアメリカも。

（両国を落とすまで、終わらない戦争。気が、遠くなるよ。）

彼にとっての終焉は何処なのか？それはまだ、誰にも分からなかった。本人でさえも。

首都攻撃

翌朝から再び進撃を開始した。ポーランド国内を縦横無尽に駆け巡るドイツ軍に、ポーランド装甲連隊は壊滅し、ポーランドにとって有力な騎兵師団で対抗するしかなかった。

「騎兵隊など、後方の歩兵部隊に任せろ。」

エーベルト指揮する第6機甲師団の所有する120台の戦車は出現する騎兵師団を無視し、ワルシャワ目指して一直線に走る。

「戦車が走っています。攻撃する気はないようですが。」

「戦う意思のない敵など放っておけ。空軍に要請して急降下爆撃機を派遣させろ。」

「了解。」

すぐさま空軍のシュトゥーカが駆けつけ、急降下を開始する。

「目標、ポーランド戦車。」

急降下爆撃機を指揮するのは、有名な戦車破壊王『ハンス・ウルリッヒ・ルーデル』だった。史実でのポーランド戦では偵察機の配備だったのに、エーベルトが色々と手を回して爆撃隊配備にした。

「投下。」

投下した60？爆弾4個はポーランド戦車群の中央に命中。数台を巻き込んで破壊した。他の者も急降下を開始し、逃げるポーランド戦車を壊滅させる。

「残りは下の部隊に任せればいい。」

上昇させ、帰還を始めるルーデルの部隊は下に居るエーベルトの指揮する第6機甲師団に無線に報告する。

「やはり、ルーデルを急降下爆撃隊に配備して正解だったな。」

「それよりもどうします？。あの残った戦車は。」

「そうだな・・・、6台だけ？号戦車を送って撃破させろ。指揮はヴィットマンが執ればいい。」

第二次大戦の戦車エース、ミハエル・ヴィットマンも第6機甲師団として参加していた。その彼に6台の？号戦車を預け、エーベルトはワルシャワ目指して前進を続ける。

「撃ち方用意よし。」

ヴィットマン乗車の？号戦車は、逃げるポーランド戦車を捉える。

「撃て。」

発射された砲弾は、左を走る戦車に命中して破壊した。ようやく気付いた戦車隊は、反撃しようと散開。攻撃を始めた。

「やるじゃねえか。」

反撃を受け、車体がいっきりに揺れたヴィットマン乗車の？号戦車は次に向かってくる戦車に狙いを付ける。

「撃て。」

戦いは一方的だった。訓練不足が出ているポーランド軍は、各戦線に敗退を喫し、次々と首都へ追い込まれている。ポーランド政府は、降伏の用意を少しずつ始めているのだった。ポーランド戦線に投入されたドイツ戦車の総計は8000台以上（史実では2400両ほど）。航空機は3000機以上が投入された（史実の開戦時の保有機全て）。

「南方軍は合流しました。」

ポーランドの南を蹂躪した部隊はサン河のワルシャワから見て反対側に集結し、渡河の用意をしていた。

「北方軍から、何時でも突入できると言う報告が来ました。」

「そうか。」

南方軍司令官レントシュテット上級大將は集結した南方軍総兵力を見て、

「これから、空軍が最後の猛爆を開始する。それが終了次第、我々南方軍は首都ワルシャワへ攻め入る。」

北と南から挟み撃ちし、逃げ場を失ったポーランド軍を一気に降伏へと追いやる計画だった。

「来たぞ。」

4発大型重爆、ME264を始め、史実では完成、もしくは活躍でしかなかった爆撃機がワルシャワへの最後の爆撃を始める。

「目標、ワジェンキ水上宮殿。投下!!」

官庁街の中心に位置するワジェンキ水上宮殿目掛けて爆弾が次々と投下される。

「爆撃続行中。ワルシャワ市内に、逃げ惑う市民を確認。」

爆撃隊は上空からワルシャワ市街を逃げ惑う市民を見る。彼らも、作戦とは言えこんな真似は出来ればやりたくない。

「これで、降伏すればいいのだが。」

官庁街を中心に、ワルシャワの40%を近くを破壊した爆撃隊は悠々と飛び去る。ポーランド空軍は既に飛行場を破壊され、飛び立てずにおり、首都に空軍兵も歩兵として防衛に付いていた。だから、爆撃隊は戦闘機を気にせずに昼間から堂々と爆撃できたのだ。

爆撃が終わり、南北から戦車や歩兵が突入する。

「前進し、その交差点を陣取れ。」

エーベルト乗車の？号戦車は見晴らしの良い交差点を陣取り、そこから周囲に居る戦車を撃破した。

「爆撃の中を戦車が生き残るなんて、運のいい戦車だ。」

破壊された戦車を見て、エーベルトは言う。しかし、生き残れたのは中心街に居なかった戦車のほんの数台で、殆どは官庁街のある中心部に居たため、戦車隊はもう居ないも同然だった。

「北部は20%を占領。南部は15%を占領しました。」

「後は歩兵に任せろ。戦車で市街戦はもう十分だ。」

前の戦いでやはりどんなに優れた戦車でも市街戦は不向きだと学んだエーベルトは戦車を市外周辺に配置し、逃げるポーランド兵だけを狙わせた。やはり、市街地は歩兵のみで突入するのがベストだろう。

「たった今、ラジオを傍受。ポーランド政府は、降伏すると発表しました。」

脱出した戦車を撃破したところで、無線手がそう伝える。

「そうか。これで、ポーランドは終わったんだな。」

開戦から僅か2日間でポーランド政府は降伏。近代戦史、稀に見る早業でドイツはポーランドを降伏に追い込んだのだ。

「はい。しかし、たった今本国からのラジオ放送で、英仏が宣戦布告しました。」

「やっぱり、布告してきたか。」

歴史通り、1939年9月3日。英仏、ドイツへの宣戦布告。長い長い、第二次世界大戦の火蓋は、切って落とされた。

策略

9月5日。エーベルトの予測通り、ソ連はポーランドの東側分譲を要求してきた。

―ベルリン　総統官邸―

「エーベルト君、今回のポーランド侵攻は見事であった。」

総統命令で呼び出されたエーベルトはベルリンの総統官邸を訪れていた。

「はい。それで、ソ連はやはりポーランドの分譲を要求したのですね？」

「うむ。余は、この申し入れは受け入れ難いと思っている。共産主義の赤軍など、我が機甲師団を持ってすれば全滅も容易いのだ。どう思う？」

「確かに、現兵力を鑑みるに、可能でしょう。ただ一つ、燃料があればの話ですが。」

「どういう事かね？エーベルト大将。」

「ポーランド侵攻に大量の戦車を割いてしまい、燃料が大量に失われました。兵力の再建は可能ですが、燃料が無ければ戦車や航空機は役に立ちません。」

「では、余にどうしろと？」

「ソ連との一時的な同盟。勿論、三国同盟の一時凍結とフランス侵攻。私の機甲部隊を除き、ポーランド侵攻に参加した部隊はその後、東部欧州の侵略に投入されてしまっている。チェコをはじめ、ルーマニアやギリシャにまで侵略を開始しております。これでは、燃料は底を尽き、西部方面まで燃料が持ちません。幸い、ソ連には有力な油田があり燃料などの軍事物資を輸入すれば良いでしょう。」

「余に、宿敵スターリンと同盟を組め。と言うのか？」

「総統、一時的だと言ったはずです。日本が居るではありませんか。」

「極東の同盟国か。あの国にソ連を席卷できる力はないと思うぞ。」

「我々の？号戦車を潜水艦を使って日本に送り、それを使ってソ連侵攻を日本が行わせます。そして、ソ連支援を名目にソ連領内に入り込み、重要都市に到達後に三国同盟の復活でソ連攻撃開始。これが、私の考えた戦略です。」

「面白いな。確かに、面白い。」

「外務大臣、リップントロップを日本に派遣させましょう。彼らにアメリカとの戦端を開かせず、まずはイギリスを落とすのを先にします。アメリカの植民地は特に重要な石油などありませんから、イギリスを落とす事に賛成するでしょう。」

「当面の敵をフランスとイギリスを最大の敵対国にする・・・か。エーベルト君。」

「はい。」

「その策、成功を期待しておるぞ。」

「ありがとうございます。総統。」

9月6日、リッペントロップは日本へと長距離重爆撃機に乗って東京へと向かった。そして、同日。？号戦車を積んだ輸送潜水艦がキール軍港を出港し、日本目指して航行を開始した。

9月7日、ソ連外交官ヴァチエスラフ・モロトフがベルリンに到着。独ソ同盟が締結され、同日ポーランド東側を分譲され、石油などの軍事物資が大量にドイツ占領下のポーランドに運ばれてきた。

―ビュンスドルフ 陸軍総司令部―

「総統、どういう事ですか!？」

エーベルトは陸軍総司令部にて再びヒトラーに謁見した。

「北欧にいきなり侵攻を開始するなんて、北欧に我が同盟国のフィンランドがあるのですよ。それに、侵攻を開始したノルウェー北部には政府ですら極秘のドイツ海軍ドックがあるです。早急に、北欧侵攻は中止してください。」

9月7日。独ソ同盟の裏で、ドイツは海軍支援もとに陸軍を北欧のノルウェーとスウェーデンに上陸を行った。デンマークにも侵攻し

たが、僅か3時間足らずで戦闘は終わり、占領された。

「スウェーデンの鉄鋼が必要でな。その迅速な補給の為にスウェーデンは必要だったのだよ。」

「かと言って、あの国は我が国に友好的だった筈。交渉次第では、どうにでも成った筈です。」

「その友好国が、こんな物を贈ってくるかね。」

そう言って、ヒトラーは電文をエーベルトに見せる。

『スウェーデン政府は、今後一切の鉄鋼輸出を停止する。』

「こんな物、どうせイギリス辺りの差し金ですよ。あの国にそんな勇氣はありませんからね。イギリス辺りが誑かしたのでしょうか。」

「エーベルト君、だから余はスウェーデン侵攻を行ったのだ。」

「大体の事情は分かりました。しかし、ノルウェーは？」

「ノルウェーとの海上補給路が寸断され始めてな。報告では、ノルウェー沿岸砲台から攻撃を受けたという事だ。」

「それも、イギリス辺りが誑かしたのでしょう。まあ、侵攻してしまったものは仕方ありません。フランス侵攻の兵力に支障が無ければ、どうとでもなるでしょう。」

「エーベルト君、何故そんなに勝ちを急ぐのだね？」

「総統、あなたの育て上げた空軍と陸軍。あれが最強だと、世界に見せつけるためですよ。」

「君が軍を離れ、兵器産業省を立ち上げて兵器を生産していたからではないのかね？」

総統は椅子から立ち上がってエーベルトの所に近づいてくる。

「総統、勝利するには？・？号戦車では不十分でした。その為の兵器産業省です。」

「余は、君に感謝しているのだ。ドイツの危機を見ていた人間が余以外にも居たことを。」

「ただ一人、総統だけがドイツの未来を案じていた。そうですよね？」

「余は、世界を見ていたのだ。ドイツだけでなく、世界を。」

それを言い残し、ヒトラーはベルリンに戻った。

（総統、貴方の見ているのは世界ではなく、ドイツ人だけでしょう。）

エーベルトは、ただそれだけを思った。

進撃用意

―トリール―

ここに、フランス侵攻部隊の主力戦車部隊が次々と集結を始めた。

「グデーリアン大将、閣下の部隊がルクセンブルを落としたと同時に我が第28機甲師団と合流。ベルギー国境を突破してアルデンヌを抜け、フランス国内に侵攻する。それで、宜しいですね？」

エーベルトは、ドイツ電撃戦の創設者であるハインツ・グデーリアン大将と作戦の打ち合わせを行っていた。

「そうだ。君は、確かポーランド戦線では自らも戦車に乗って陣頭指揮を執ったそうじゃないかね？」

「はい。」

「陸軍総司令部では専らの噂だよ。指揮官がそんな危険を冒してまで前線で指揮を執る必要は無いと。」

「戦場にいる以上、私は部下と同じ危険を味合わなくてはならない。それが、私を信頼して付いて来る部下へ、私が出来る最大限の行いだ。」

「しかし、それで指揮官を失ってしまったては、元も子もないがね。」

「そうだった時は、私はその程度の人間だったって事ですよ。」

「では、今回も君は最前線で指揮を執るのかね？」

「勿論。必要なら、私が先陣を切って敵中の突入しても構いませんよ。」

フランス戦に投入される戦車は全部で9000台。その内の約半数がアルデンヌ突破に使用される。

「いや、やはり君はレオパルドで部隊の中間で指揮を執る方が似合っているよ。」

「はあ。」

暫く、グデーリアンは黙っているが、突然話題を変えて

「そう言えば、向こうでも戦車の集中運用部隊が1個師団だが編成されたそうじゃないかね。」

「ド・ゴール將軍のS35中戦車で編成された機甲師団ですか？あんなの、ドイツ戦車なら十分撃破可能ですよ。」

史実では、装備している戦車があれなので、苦勞を強いられた。しかし、現在機甲師団の主力は？号戦車なのだ。十分に撃破可能。

「空軍の掩護は十分だそうだ。航空機を揃えられる限界の5000機近くを国境線に配備したそうだ。」

「5000機も、ですか。」

「エーベルト大將。空軍も、捨てたもんじゃないよ。なんせ、電撃

戦成功の要は、空軍なのだから。」

「それは、分かっています。」

そこへ、司令部付きの通信将校が入って来た。

「閣下、海軍総司令部から報告です。本日生起した北海海戦において、我がドイツ海軍は戦艦2隻、空母1隻他重巡などを合わせて12隻撃沈したと報告してきました。」

「1、12隻も!？」

「はい。我が方の損害は駆逐艦2隻が沈没しただけの模様。海軍始まって以来の大勝利です。」

「敵戦艦、艦型は？」

「ネルソン級だそうです。2隻とも。」

「砲撃で沈めたのか？」

「戦艦は砲撃で沈めました。残りは空母艦載機です。」

「そうか、空母も既に運用を始めたのか。」

史実では空軍の妨害や資材が無い為に空母が完成させられずに、ドイツ航空機動部隊の夢は潰えた。しかし、ノルウェー北部で建造された空母と総統命令での航空機動部隊編成が成功。運用が始まっている。

「エーベルト大将、私は未だに海軍の航空機動部隊編成の必要性が分からないのだが、君は確か陸軍でありながら海軍航空機動部隊の編成を強く推進していたそうだね？。何が有効なのか、説明してはもらえないだろうか。」

グデーリアンは空軍の航空機運用は納得できていたが、海軍の航空機運用が納得できていなかった。

「えーとですね、まず空母は洋上の航空機基地と思ってくれればいいです。そして、我がドイツ初戦機の弱点は航続距離不足。まあ、これは長い航続距離を持った機体を生産中なので、直に問題なくなるのですが。現在の主力機であるBF109では、今後攻めることになるイギリス奥地まで十分な爆撃機護衛が出来ないんです。そこで、洋上の空母にて補給。奥地侵攻って、事ですよ。」

「なるほど、大体は分かった。確かに、我がドイツの保有するBF109は片道400？程度。これでは、イギリス上空に戦闘等も考えると20分程度しか留まれないからな。」

「それでは、奥地まで護衛できないので、途中の補給基地が必要なんですよ。それが、空母です。」

「なるほど。それに、空母があればイギリスの何処でも自由に狙えるな。」

「はい。北部工業地帯も、十分狙えます。」

イギリスの北部には工業が盛んなグラスゴーなどがある。そこを重点的に爆撃する計画も海軍が建て、実行用意に入っている。

「しかし、我々の本命はまず、フランスの占領です。」

「エーベルト大将、貴軍の活躍も十分に期待している。」

イタリアも侵攻用意に入ったが、当然誰もイタリアの力など当てにしていない。まともな戦車を保有していない。自走砲はセモヴェンテda93／53があるが、まだ実用化されていない。戦闘機はファルゴレやあの第二次大戦最強の戦闘機と名高いP51にも引けを取らない名機と言われているベルトロがあるが、まだ実用化されていない。

「イタリアには、期待・・・」

「していない。」

グデーリアンはハッキリとエーベルトに告げた。悲しいが、ドイツ軍の間では『今度はイタリア抜きでやろうぜ』とまで言われた弱体軍だから。ムッソリーニの軍備増強はヒトラーほど徹底していなかったのだ。

「では、作戦説明は終わりだ。どうせ、止めても最前線で指揮をするのだろう。前進は、任せた。」

「了解しました。グデーリアン大将。」

乗車のレオパルドに乗り込み、ヘッドフォンセットを付け、出撃命令を待った。

「エーベルト大将、私はここに配属になりました。」

「君、一体どうやって私の副官になり、しかも最新鋭戦車レオパルドの操縦手になったんだよ？」

「内緒です。」

エーベルトの副官であり、この世界にエーベルトを呼び寄せた張本人。エルフ、ディエ中尉が、エーベルト乗車のレオパルド一号車。その操縦手に配属されていた。

「エーベルト閣下、総司令部より全軍に作戦を開始せよとの通達です。」

「分かった。」

そう言い、前進の合図を配下の第28機甲師団に下す。それを見た戦車隊は、次々と前進を開始したのだった。

1940年、3月7日。ドイツ、フランス侵攻開始。

アルデンヌを突破せよ 前篇

―ルクセンブルク―

「前進を続けろ。」

出撃してから燃料補給以外で止まることなくエーベルト指揮の第28機甲師団は前進を続けた。グデーリアン指揮の第19機甲師団はルクセンブルクの南部を制圧後にアルデンヌ突破を開始する予定だった。

「歩兵と第11機甲師団から通信。ベルギー国境線を突破し、戦闘を伴いながらも進行中。沿岸部隊の第2歩兵大隊と第3歩兵大隊、第10機甲師団からは順調に進行中との事。」

無線手が戦況を報告する。

「分かった。第2爆撃隊と第1輸送大隊に、ロッテルダムの攻撃を命じる。輸送機からは空挺部隊降下。占領要請を出せ。」

「了解。」

港湾都市ロッテルダムを抑えれば、オランダの大半はダンケルクを目指す必要がある。史実のダンケルク撤退戦を知っているエーベルトは海軍に支援要請を出していた。巡洋戦艦シャルンホルストとグナイゼアフを護衛の艦艇と共に出撃。Uボートをドーバーの至る所に配置し、撤退を始める輸送船を沈める計画だった。更に、空母までも動員してこれを掩護させる。

「順調だな。」

エーベルト指揮の第28機甲師団は敵に発見されることなく突き進んだ。

―アルデンヌの森―

「気を付けろよ。」

アルデンヌの森に入った機甲師団は遅れて到着したグデーリアン指揮の第19機甲師団と共に前進していく。

「閣下、ベルギー方面は大戦果だそうです。進軍に歯止めをかける存在は、もう居ないそうです。」

「そうか。こっちも、突破したら即戦闘だからな。」

エーベルト乗車のレオパルドの横に、グデーリアン乗車の？号多砲塔戦車が並んだ。

「エーベルト大将、貴軍の前進が少し早い。これでは、直ぐに燃料切れになるぞ。」

「グデーリアン大将、こちらは急いで突破しないといけないんですよ。他の部隊に戦果を取られちゃあ、士気にも関わりますからね。」

「だからって、もう少し進軍速度を落とせんかね？これでは、補給部隊が追いついてこれんよ。」

第28機甲師団の平均進軍速度は現在28？／h。異常なまでの進撃速度だった。戦車もオーバーヒートして何台かが落伍した位だ。

「落伍した戦車は後方の歩兵部隊に任せれば十分です。こっちは今、最高の進撃速度を記録しているのですから。」

？号多砲塔戦車がだんだん離れていく。速度が限界に達したのだろう。

「それでは、突破一番手の名誉は、自分が頂きます。」

しかし、アルデンヌの森を1日で突破する事は出来ない。広く、密度の高い木が進撃の邪魔になり、後半は思う様な進撃が出来なかった。夜間の進撃は危険の為、野戦キャンプが張られた。

「半分位の進撃だな。」

「はい。」

合流したグデーリアン大将が夜戦キャンプの本部に入ってきた。

「君の部隊でも、一日で突破は不可能だったか。」

「はい。」

エーベルトは汗だくだった。まだ、暑い季節ではないが、ジメジメした森を空調機が付いていない？号戦車で、しかもエンジン全開で走り続けたのだから当然だった。

「私の部隊は8台がオーバーヒートで落伍しましたよ。内、2台は追いついてきましたが、あとは追いついてきません。」

「全く、だから進撃速度を落とせと言ったのだ。このままでは、戦う前に大半が落伍するぞ。」

「はい。」

幾ら電撃戦とは言え、エンジンに負荷をかけ過ぎてはならない。それが原因で8台がオーバーヒートしたのだから。

「戦車は氷などで冷却させてあります。明日には、また全力運転が可能かと。」

「だから、進撃速度を落とせと言ったのだ。今日みたいなことを明日もする積りか？」

「はい。」

「はい、じゃないだろう!!」

グデーリアンは怒り気味だった。大事な戦車を戦う前から戦闘不能にし、また明日も同じことをしようとするのだから。

「失礼します。」

と、エーベルトの副官であるディエ中尉が入って来た。

「エーベルト大将、本日の戦闘集計が入ってきました。」

「そうか。」

そう言って受け取り、暫く読んだ後にグデーリアンに渡した。

「作戦は順調のようだな。」

「ええ。」

グデーリアンはそれを見て、とりあえず安堵した。

「閣下の考案した電撃戦は各方面で成功を出しています。明日は、我々が結果を残しますでしょう。」

「そうだな。しかし、今日のような進撃速度は絶対にするなよ。」

「分かりました。グデーリアン大将。」

敬礼をし、自分の寝るテントに戻った。

—イギリス 首相官邸—

「首相、もはやドイツの進撃は凄まじい限りです。ベルギーは明日にでも降伏し、フランス国境を突破されそうな勢いです。」

補佐官が英国首相チャーチルに大陸での戦況を説明する。

「うぬぬ、ファシストめが。」

持っているペンを折り、壁にかけられている欧州の地図に向かって投げた。ペンは見事にドイツの首都、ベルリンに突き刺さった。

「ファシストの侵攻を止める手段は無いのか!？」

「く、空軍から早急に航空機を送るべきとの要請が。それに、更なる地上軍の増派が陸軍からは来ています。」

「戦争は大陸では終わらん。これ以上の増派は我が国にの防衛力欠如に繋がる。」

「し、しかし首相。フランスは、もはや敗北が決定的です。増派がなければ、一週間と持ちません。」

「負ける戦場に、わざわざ増派の必要も無かろう。可能な限り船を集めたまえ。必要なら、漁業組合から漁船などの船舶を徴用しても構わん。」

「は、了解しました。」

「それと、工場は北部に移す用意をしたまえ。これから、液体の雨ではなく、爆弾の雨が降るだろう。」

「はい。」

そう言って、補佐官は出て行った。

「畜生め、ファシスト。アメリカの参戦があれば、こうはならないのに。」

電話を取り、アメリカのルーズベルトに繋いだ。

「同志、ルーズベルト。貴国は一体何時になったら参戦してくれるのだ？ もはや、貴国が送ってくる義勇軍だけでは戦えない状況なのだ。」

『まあ待ちたまえ同志、チャーチル。日本との交渉をのりくらりで引き延ばして戦端を開かせる交渉を行っておる。直に、日本は我が国との交渉を始めるだろうからな。』

「日本は、中国で一杯一杯です。戦端を開くとは、到底思えません。」

『奴らは都合のいい事に石油が取れない。その石油を止めれば、枯渇の恐怖から戦端を開くだろう。』

「それはいい考えです。その時、我が国も協力いたします。」

『同志、チャーチルよ。今度の会談は我が国の戦艦であるウェストバージニアで行おうではないか。』

「それは良い考えです。では、時間等は後程お聞かせください。」

そう言って電話を切り、床に就いた。

アルデンヌを突破せよ 後篇

「前進開始。」

朝になり、再び進撃が開始された。喉咽式こういんマイクは騒音下でも聞き取りやすく声を伝えてくれる。

「アルデンヌを今日中に突破し、フランス機甲部隊の後方に出る。」

マジノ要塞が唯一効力を発揮できていないアルデンヌの森の出口からフランスの防衛ラインを切り崩すアルデンヌ突破戦は最終ラインまで達した。

「さーて、こいつの主砲が早く敵を喰いたいと唸っているぞ。」

エーベルトはレオパルドの主砲を撫でて、砲手に言う。

「大将、こんな素晴らしい戦車で一緒に出来て光栄です。」

「ああ。確り頼むぞ。」

出口まで、もう一時間と走らずに到達できる。そしたら

「戦闘開始だ。」

だった。

「お、おいあれ!？」

アルデンヌの森を照会中の斥候部隊がアルデンヌを進む独戦車隊を見つけた。

「し、至急！！本部に連絡だ！！」

急いで通信兵は無線機で本部に繋ぐ。

「こ、こちらアルデンヌ哨戒班です！！。独戦車隊が大挙してアルデンヌの森を通過中！！」

『アルデンヌの森を？馬鹿も休み休み言いたまえ。』

当時、フランス軍上層部内で誰がアルデンヌの森を戦車で通過しようとする者は居なかった。

「ほ、本当です！！ドイツの大型戦車を中心に、大挙して通過中です！！通信訓練ではありません！！」

『分かった分かった。警戒だけは出しおいてやる。』

半分は当てにしていなかった。

「通信を傍受。」

「何？」

エーベルト乗車のレオパルドに、先ほどの会話が傍受されていた。

「敵は我々の通過を伝えたようですが、司令部は誰も取り合わなかったみたいです。」

「だろうな。フランスの堅物に、こんな森を突破してくるなんて考える人間は居ないよ。」

その時、出口が見え始めた。

「じゃあ、さっきの報告が正しいかどうか、敵さんに分からせてあげましょう。」

森を突破した戦車隊は、案の定、敵機甲師団の後方に出れた。

大半の部隊がベルギーの掩護に向かっていた為、残った僅かな兵力で反撃しなくてはならないフランス連合軍と、主力戦車隊と随伴歩兵部隊を投入したドイツ軍とでは戦力差も士気も、違い過ぎた。

「撃て!!」

シャルル2Cを主力に、ソミュア35中戦車を配備したフランス国境防衛機甲師団はフランスで唯一の機甲師団だった。これが破壊されると、機甲師団を編成する余力のないフランス軍の崩壊は当然だった。そして、それを知っている独戦車隊はこれを何としても撃滅する必要があった。

「目標命中。良い腕だ。」

35中戦車に直撃し、炎上している。

「敵さん、混乱してます。」

「ディエ、左に前進。一気に挟み込む。」

「了解。」

5台のレオパルドを率いて、エーベルトは左から挟み込んだ。

「パンターでも・・・十分だな。」

パンターの一撃で、シャル重戦車が炎上する。

「後は・・・つと、航空部隊が来たか。」

見ると、シュトゥーカが編隊を組んで飛来してきた。

「離れるぞ、巻き添え喰いたくなきゃ離れろ！！」

独戦車隊は一旦砲撃をやめて距離を取る。猛訓練を積んだ独空軍の急降下爆撃隊がミスとは思えないが、万一の事もある。

「目標、仏戦車部隊。投下！！」

急降下爆撃隊は狙い通りに戦車に爆弾を投下。数台を破壊した。

「後は戦車隊に任せろ。我々は帰隊する。」

「へー、案外腕はいいんだな。」

「急降下爆撃隊より入電。貴軍の健闘を祈る。っだ、そうです。」

「そうか。」

っと、言っても。もう大半が破壊されている。元々、フランス軍は戦車は歩兵支援が当然と考えており、編成された機甲師団と言っても40台にも満たない少数の戦車しか配備されていなかった。

「グデーリアン大将より、貴軍は補給を受けよ。っとの事。」

「ディエ、燃料に余裕は？」

「えーと、ありません。」

「分かった。後退して、補給を受ける。破壊した戦車は随伴歩兵に任せておけ。」

後退をして、アルデンヌの出てきた所で燃料の補給を始める。

「上出来ではないか。」

「どうも、グデーリアン大将。」

グデーリアン大将の部隊は更に前進を開始し、国境線沿いに次々と街を占領して海を目指している。英仏軍は海へと追い詰められていく。

「敵は、ダンケルクを目指しているそうだ。君の読みが当たったね。」

「沿岸部隊の位置は？」

「ダンケルクまではもう少しだそうだ。潜水艦や艦艇は海軍からの報告では北海を通過してドーバーまであと少して所らしい。レーダーがダンケルクを目指す大量の船を捉えたそうだ。」

「そうですか。」

ダンケルク撤退戦を阻止せねばならない。英国本土上陸を敢行するには、その大勢の脱出を防ぎ、イギリスの防備を削ぐ必要があった。それに、大勢の人命が失われれば、講和に応じるかもしれない。

「君は、？号多砲塔戦車に乗らないのかね？あれは良い戦車だぞ。指揮もしやすいし。」

「ええ。しかし、あれは装甲が薄いので前線での指揮は向きません。なら、速度も速く、装甲の厚くて強力な主砲を備えるレオパルドでなら、十分に前線で指揮ができます。」

「ふむ、しかし君の部隊でも中隊長は乗っておるぞ。それなのに、君が乗らないとなると少し。」

「乗りたいなら乗ればいいです。」

「まあいい。君に、総統から命令が来ている。」

「はい？」

この重要な作戦の最中に新たな命令？

「至急、副官と共に本国へ出頭せよとの事だ。君の部隊は、私が臨時に指揮を執る。」

「何でまた、こんな作戦の最中に？」

「分からんが、君の危険な行為に総統も目を向けたのだろう。指揮官が最前線で、しかも戦車で指揮を執る事はドイツ軍史上、前代未聞だからな。」

「何にでも初めはあるでしょう。」

「冗談言っていないで、戻る用意をしたまえ。」

「分かりました。」

表に強行着陸してきたJU52に乗り、本国へと向かった。

アルデンヌを突破せよ 後篇（後書き）

ここから先、見るも見ないも自由ですよ。なんせ、物語はとんでもない方向へ進んでいくので。

あ、別に死亡フラグぐつとかじゃないけど。

總統要塞 連合軍暗号名『鷲の巢』

―陸軍總司令部―

「ヴァルター上級大将、私を前線が戻すとはどういう事ですか？」

總司令部に出頭したエーベルトは早速、陸軍總司令官のヴァルター・フォン・ブラウヒッシュ上級大将に抗議をした。

「私にそれを言われても困る。全ては、總統閣下が命じられたことだ。」

「なら、その總統閣下に会わせていただきたい。」

「私にはどうする事も出来ないぞ。」

そこへ、SSの将校が入って来た。

「エーベルト大将、總統が呼びです。」

「分かった。」

SS将校に連れられ、車はバイエルン州に入り、ケールシュタインを上って行った。

―バイエルン州―

「こんな所に何が。」

窓から外を見ると、山頂付近に建物が見えた。

（なるほど。総統要塞、ケールシュタインハウスか。）

そこから見えるのは総統要塞、連合軍名『鷲の巣』だった。

「ここからは専用エレベーターでしか行けません。」

鉄製の門を潜り、そこで車を止めて歩く。壁際にはSSの警備兵がライフルやマシンガンを持って警護していた。

「総統は、本来は高所恐怖症なのですが、あの山荘でお過ごしになられております。」

エレベーターのスイッチを押した将校は、エーベルトに説明する。降りてきたエレベーターの内部は真鍮で出来ており、それが鏡の役割も担っていた。

―総統要塞 通称『鷲の巣』―

ケールシュタインハウスだが、今では連合軍の付けた暗号名で有名となってしまうている総統要塞はヒトラーを始め、ナチス高官の多数が訪れていた。

「ハイル・ヒトラー。」

国防軍所属だが、あくまでもヒトラーの前ではナチス式敬礼を行った。

「エーベルト君、貴君の働きには感心するもの大である。」

「総統、その感心する者を前線から遠ざけたのはなぜですか？」

「総統は君の事を高く評価しておるのだ。ついては、君にはプロパガンダの為にも戻ってもらった。」

「ゲッベルス宣伝相、相変わらず、あなたはプロパガンダの天才だよ。」

ヨーゼフ・ゲッベルス宣伝省大臣。ナチス党員で、ヒトラーの片腕として宣伝活動に従事。今日でも、彼の宣伝手法は使われ続けるプロパガンダの天才。

「それは、お高く評価されたことで。」

ゲッベルスは感心したように言う。

「ゲッベルス博士、その辺でいいでしょう。」

ヒトラーのもう一人の片腕であり、ヒトラーを慕い、ヒトラーに最も信頼されているナチス党員、ルドルフ・ヘスがその場にいた。

「エーベルト大将、貴君の働きに総統は高く評価され、貴君に初の大鉄十字星賞を授与されるそうだ。」

そう言うと、総統自らが鉄十字星賞を授与した。歴史上、ナチスドイツ時代で授与された者は一人もいない。初の受賞者だった。

「君は、名実ともにドイツの英雄となったのだ。」

最前線でポーランド軍を破り、アルデンヌでも最前線で指揮を執ったエーベルトはその成果を認められ、初の受賞が行われた。

「感謝します。」

「だが、君にとっては残念かもしれん。君は今度創設される独立陸軍に第28機甲師団を置くことになった。ついては、部隊名を第28独立機甲師団となったのだ。」

「独立陸軍？」

「そうだ。ついては、君の副官を除く全員が別の部隊に配属となる。君は」

「総統、到着されました。」

突然、SS将校が入って来て、ヒトラーに伝える。

「そうか。君は彼らを指揮してもらう。」

入って来たのは、まだ中学生を卒業したような少年・少女たちだった。

「冗談でしょう、総統？この者たちはまだ、戦争のせの字も知らない子供ですよ。とても、戦力になるとは思えません」

「君は、特別幼年志願学校の存在を知っておるかね？」

「特別、幼年志願学校？」

「再軍備宣言の日に合わせて創設した少年・少女らが軍人に志願した者を対象に入学させ、教育する機関だよ。彼らは、その一期生の中でも特に優秀な戦車長だよ。部下もな。」

確かに、立ち振る舞いは軍人そのものだった。ピシッと、背筋を伸ばし、綺麗に整列している。

「しかし、本当に彼らは？」

「子供だよ。それも、恐れ知らぬな。」

「確かに、そうですが。」

「受けてくれるな？」

半分は強引だった。

「わ、分かりました。」

「そうか。彼らを宿舎に戻せ。」

そう、SSに命じた。そして、ヒトラーは奥の部屋にエーベルトを連れて行く

「君には、その詫びもある。」

そう言って、壁に掛けられている幕を下ろした。

「君には、君たちの部隊にのみ専用戦車を提供する。」

その幕には戦車の図面と要目、そして完成図が描かれていた。

「この地下にはその1号車が置かれている。来たまえ。」

壁のスイッチを押し、この部屋が下に降り始めた。

―総統要塞 地下兵器室―

「ポ、ポルシェ博士!？」

その兵器室に居たのはエーベルトの立ち上げた兵器産業省に所属するフェルディナント・ポルシェが居た。

「やあ、エーベルト大将。お久しぶりです。」

「しかし、何故ここに？」

「総統閣下が君への戦車を見せると言ってな。私自らが説明したかったのだよ。」

「そうですか。」

「その辺でやめときたまえ。博士、シートを取るんだ。」

「はい。」

シートに被せられていた物が、姿を現した。

「こ、これは!？」

長い砲身、それにレオパルド戦車よりも一回り程大きい車体と砲塔。そして、洗練された転輪とエンジン。

「これは、君が最終形態と名付けた、レオパルドの進化形だよ。」

ポルシェ博士が説明する。

「主砲は140mm70口径。射程は8?と言う驚くべきものだ。装甲はレオパルドよりも大体30mmほど厚くなっている。エンジンは1600馬力のガスタービンエンジンを採用し、速度はかなり向上している。足回りも完璧だ。それに、様々な新兵器が搭載されている。砲塔旋回方式は?号戦車から採用したペダル式だが、固いと言う前線の声を配慮し、レバーによって固さを調節出来るようにした。」

「なるほど。」

「それに、砲身もレバーで固定できる様にした。そのお陰で、走りながらも発射できるようになった。その他、赤外線・暗視照準儀で夜間戦闘も可能だ。周囲には我がドイツエレクトロニクス技術の最高傑作、センサーも装備し、周囲に近づく歩兵を感知できるようになった。操縦にはハンドル式で、周囲の状況を見やすいように車外カメラなんかも装備している。もちろん、赤外線・暗視対応のな

」
速度などは別とし、装備している兵器は戦後第3世代にも対抗できる戦車だった。

「自動装填装置は勿論、装備していますよね？」

「なんたって、子供が操るのだからな。大人でも、140mm砲弾を連続で装填し続けるなんかきつ過ぎる。だから、勿論装備したよ。しかも、最新式のを。このお陰で、連射砲並みの連続発射も可能だ。砲身には冷却装置も装備している。」

「やはり、ドイツの戦車技術は世界一ですね。」

「そうだ。我が1000年帝国は永久にその繁栄を掴みとれるだろう。君の部隊には正直、期待している。連合軍の撤退作戦阻止は貴君の進言通りに行動でき、輸送船などの撤退兵を乗せた船の9割以上を沈め、大半が海没した。」

「では、フランスも降伏しますか？」

「直ぐだろう。その時は、君も部隊を連れてパリに来たまえ。」

「はい。」

1940年3月28日、連合軍、ダンケルク撤退作戦失敗。32万以上の死者を出すと言う大損害を被り、イギリス防衛の要とも言える兵力を失った。航空兵力もドーバーを渡りきる前に空母から飛び立った独海軍の戦闘機に襲撃され、7割以上が撃墜された。この作戦失敗は英仏に大きなショックを与える事になり、対してドイツ軍

の士気は一気に上がる結果となった。

ライン演習作戦 前編

総統は続いて海軍に、連合軍を更に衰退させる目的で、ライン演習作戦を始動した。史実とは内容が違うが、ドイツ海軍主力が参加する初の大規模作戦だった。

―キール軍港―

「艦隊を出撃させよ。」

キール軍港からは戦艦『ビスマルク』を主力に、シャルンホルストなどの高速戦艦、リュッツォウなどの装甲巡洋艦などが出撃していく。支援用に潜水艦も6隻ほどが出港した。

―ノルウェー北部 ドイツ海軍軍港―

「キール軍港から艦隊は出撃しました。海軍総司令部より、我が艦隊にも出撃命令です。」

「そうか。北海とドーバーの制海権を掛け、我がドイツ海軍史始まって以来の大規模艦隊作戦。生みの王者である大英帝国に対し、歴史の浅い我がドイツ海軍が何処まで挑めるのか。楽しみだな。」

北方主力艦隊指揮官『ヴィルヘルム・フォン・ティルピッツ』海軍大將は艦隊に出撃を命じた。

「出港から7時間。イギリス海軍の無電を傍受し、敵が出撃したと言う事です。」

ビスマルクが各艦船に警戒を促している。

「艦長、イギリス海軍が大挙として押し寄せた時、我々ドイツ海軍では戦力が違いすぎます。」

「分かったから黙っている!!」

艦長は弱気になった士官に大声で注意する。

「勝つも負けるも、最後はドイツ軍人らしく立派に死ねばいいのだ。」

艦長は生きて帰るよりも、死んで遺体として帰る覚悟も出来ていた。

「はい。申し訳ありません。」

「分かったら、任務に集中しろ。」

「了解です。」

潜水艦は別れて敵艦隊の捜索を行っていた。ビスマルクなどの艦艇全てに性能差こそあるが、レーダーを装備しており、それで敵艦隊を捜索している。

「偵察機を飛ばすのは如何でしょうか？折角、水上機を積んでいる

ので、使わない手はありません。」

ビスマルクにはA r 1 9 6が4機搭載されている。

「省略工事で就役を早めたので、カタパルトは積んでいませんが、クレーンで下ろして水上を滑走させれば十分です。」

「そうだな。」

水上機がクレーンで水面に降ろされ、エンジンを回す。

「全く、艦長は無茶言うよ。」

「同感だ。水上を滑走して離水し、敵艦隊を搜索せよなんて。」

「まあ、見つければ俺たちの手柄だ。俺たち水上偵察部隊の評価も上がるってもんよ。」

滑走を始め、離水した。

「偵察機、飛び立ちました。」

「そうか。頼むぞ。」

そこへ、電探室から報告が入った。

「敵編隊が接近中。数は50、それと、後方からも70機ほどが接近中!!!。」

伝声管を伝って艦橋に聞こえたこの報告に、急いでヴィルヘルムは対応した。

「艦長、至急対空戦闘を命じよ。」

「了解しました。対空戦闘用意！！」

『対空戦闘用意！！対空戦闘用意！！』

艦内マイクを使って命令が下され、対空機銃や高角砲に兵が付く。

『敵編隊は前方より50機接近中。後方より70機接近中！！』

「俺らが落としてやるぜ！！」

機銃に付いた兵は前方か後方か、どちらかに照準を向ける。

「艦長、後方からの編隊がどうも気になります。」

「どういう事だ？航海参謀？」

「イギリス軍機は我が国の航空機同様に航続距離が短いはずですが、後方に回り込む燃料的な余裕は無いはずですよ。」

「では、後方の編隊は何だと考える？」

「私は、味方機かと。」

「しかし、それであ味方という識別信号を送ってくるはずでは？」

「艦長は聞いたことありませんか？我が海軍に極秘艦隊が居る事を？」

「聞いたことはあるが、迷信ではないのかね？」

「私も、最初はそう思いました。しかし、イギリスのネルソン級を沈めたと言う我が海軍籍には無い謎の艦艇。あれは、もしかすると極秘艦隊が遣ったのでは無いでしょうか？」

「確かに、ネルソン級は謎の艦隊が沈めたと言う噂は耳にした。総統発表では事故による爆沈とも報道されている。」

ネルソン級の撃沈の報告は数々の噂が立った。表だって参加できないエーベルトの強計画で建造された軍艦を中心に編成された艦隊はドイツ海軍内でも極秘事項だった。

「航海参謀、君の先ほどの後方編隊が味方だと言う自論。絶対だと、言い切れるか？」

「はい。」

力強く返答した。

「そうか。各目標を、前方の編隊に集中させよ！！」

「やれやれ、気付いたようだな。」

航海参謀の言うとおり、後方の編隊は味方機だった。戦闘機70機が防空任務に向かうべく、アイスナー級空母から出撃した編隊だった。

「では、我々も初めての大規模空中戦だ。気を抜くなよ。」

新型艦上戦闘機『Bf16A』はフルスロットルで艦隊上空を通過していく。

「見ろ、味方機だ!!」

艦隊に居る兵も士気が高まった。上空を悠然と編隊飛行し続ける味方機を見れば士気が上がるのも納得がいくだろう。

「航空支援がある。俺たちは勝てるぞ!!」

「行けー!!、空軍!!」

宣伝上、海軍航空隊の存在も極秘であり、上空を飛行する編隊は空軍の航空支援だと兵は思った。

「ドイツの戦闘機だ!!」

攻撃に向かっていったイギリス空軍はドイツ空軍（実際は海軍）の襲撃に驚いた。

「くっそ!!、散開して各自で目標に向かえ!!」

スピット・ファイアは上昇して迎撃態勢を取る。ブレニム双発爆撃機とソードフィッシュ艦上雷撃機は散開してドイツ艦隊を目指す。

「喰らえ!!」

しかし、数ではドイツの方が勝るため、各個に捕捉されては撃墜されていく。エーベル트가艦上戦闘機の性能をスピット・ファイアに對抗できるように設計されている為、スピット・ファイアにも善戦中だった。

「何だ、この複葉機!!落ちない。」

ソードフィッシュの撃墜には苦労を強いられる。布張りの主翼は銃弾を貫通してしまい、思う様な効果が得られない。

「複葉機のくせに、生意気だ!!」

しかし、機体にはエンジンなどもあって完全な布張りにすることは出来ない。エンジンには簡単に被弾し、火を噴いて墜落していく。

「30mm機関砲の喰らいやがれ!!」

Bf16には60発と言う少数だが、30ミリ機関砲を1門だけ有している。この時代では破格の威力を持つ航空機関砲だった。

瞬く間にスピット・ファイアは火を噴き、墜落していく。

「俺たちの仕事は終わりだ。後は、艦隊に任せろ。」

上昇し、編隊を組み直して帰還を開始する。

「撃て!! 撃て!!」

数が減った攻撃隊を、射程に収めた艦隊が攻撃を開始する。

「空軍が数を減らしてくれた!! 残りを叩き落せ!!」

攻撃に来れたのはソードフィッシュ僅か6機。他は全て喰われた。

「敵、2機!! 低空に侵入。」

雷撃態勢に入るソードフィッシュを機銃と高角砲がより一層、攻撃を加える。

「駄目だ、落ちない!!」

布張りのお陰で生存性は非常に高いソードフィッシュは距離を詰める。記録では、175箇所も被弾したにも関わらずに帰還した例が残っているし、未確認だが200か所以上も被弾したのに帰還したパイロットも居たそうだ。その生存性は、伊達では無い。

「敵、魚雷投下!!」

ソードフィッシュから2本の魚雷が投下される。

「通過時を狙え、高角砲用意!!」

艦は取り舵を取り、艦が左に旋回していく。

「魚雷、距離100!!」

「回避できるか!?!」

「ビスマルクの機動力なら可能です。」

航海参謀の言うとおり、魚雷は2本とも間一髪で回避できた。

「まだまだ、来ます。」

再び、今度は一斉に4機が降下してくる。

「あれでは、当たるな。」

艦長が、そう考えたその時。2機が火を噴いて水没する。

「な、何が起こった!?!」

「艦長、上空に戦闘機です。」

「間に合ったな。」

「はい。」

2機編隊、機体の片方は黒いチューリップの塗装。

「エーリヒさんも突然駆けつけるなんて言わなかったら、どうなっ

ていたか。」

「そう言うな。」

まだ、史実では性能を覚醒しきっていない時期だが、エーベルトの歴史改変劇はここまで及んでいた。ドイツ空軍、世界一の撃墜王『エーリヒ・ハルトマン』がビスマルク上空に駆け付けた。

「機長、あれは？」

先ほど離水していた、Ar196が敵艦隊らしきものを見つける

「あれは、じゃねえ。敵艦隊だよ。至急、母艦に連絡を入れろ！！」

「了解。」

ライン演習作戦 後編

―ビスマルク―

「敵は戦艦3を中心とする巡洋艦8、駆逐艦10の編成です。」

通信兵が偵察機からの報告を読み上げる。

「戦艦が3か。こちらは本艦とティルピッツ、シャルンホルストとクナイゼナウが居るから、戦艦戦力で後れを取ってはいないな。」

「しかし、ビスマルク級はともかく、シャルンホルスト級の砲撃力では戦艦を沈めるのに威力不足です。」

「分かっている。この海戦が終了後に38? 砲を装備する予定だ。それまでの辛抱。」

ライン演習作戦完遂後に、シャルンホルスト級は本来の予定通りに38? 連装砲を搭載する工事が待っている。既に、主砲塔は完成しており、28? 砲を撤去してそれを装備するだけと言う簡単な工事の為、それほどドック入りもしない。

「それでは、最大戦速で向かおうではないか。」

ビスマルク以下、全艦最大戦速で敵艦隊目指して航行を開始する。

―ゲルマン―

「正直、もう一隻の同型艦が居れば砲戦を挑んだのだが。」

もう一隻の同型艦、ヴィルヘルムはあと数週間で就役できるのだが、それは最初から80？連装砲を装備しているため、本来の計画通りで就役する初めての同型艦となる。就役後、他の2隻もドック入りをして80？連装砲を装備される予定である。

「アーリアとゲルビル、アイスナーとバツハより、攻撃隊の発艦用意完了との事。」

無線を傍受し、正確な位置を掴んだ北方艦隊は攻撃隊の用意を終え、出撃させた。

「いいか、我々の任務は戦艦部隊よりも先に敵に損傷を与える事だ。但し、あくまでも損傷を与えるだけと言う事を忘れてはならんぞ。」

まだ、航空機で敵艦艇を沈めるのは早すぎる。史実よりも早く、航空主兵時代の到来を免れなくなってしまう。それでは、せっかく建造したゲルマン級戦艦の活躍の場が無くなってしまうのだ。

「敵は艦隊の上空に本土より飛来したスピットで守らせている。戦闘機隊は上空の制空確保、艦攻爆隊は敵艦艇へ攻撃せよ。」

Bf16は上昇し、スピットに狙いを定める。シュトゥーカ改造の艦爆と新鋭雷撃機のJu95『ライガー』が艦艇に狙いを定めた。

「スピットと遣り合う時は側面から狙うように心掛けろ。」

後部では防弾装置で搭乗員の命が一番守られやすい。だから、側面から狙うように訓練されている。

「喰らえ！」

側面からすれ違いざまに一機を撃墜し、戦果を収めたBf16はそのまま上昇して別の敵に狙いを定める。

「目標、前方の戦艦！」

フッドを捉えたJu95は魚雷を投下する。その魚雷は、面舵を切って回避されたが、

「投下！」

別の機体から投下された魚雷がフッドの左舷に命中。

—フッド—

「被害を報告しろ！！」

艦長は慌てて被害集計を行う。

「左舷に魚雷命中。浸水し、速力が低下するも、戦闘に支障なし。」

「危ない!!」

JU95がすれ違いざまに艦橋に機銃弾を撃ち込んできた。その中の一発が、先ほど報告していた兵の頭部に命中し、死亡する。

「艦長、艦橋の窓ガラスが割れ、敵が狙い撃ちしてきます。」

「至急、艦橋から退避しろ。夜戦艦橋で指揮を執る。」

その時、左舷に再び魚雷が命中した。

「そろそろだな。」

待ってましたとばかりに、上空から急降下を掛けるシュトゥーカは被雷したフッドに爆弾を投下した。

「流石に、250?では効果が薄いな。」

まだ、本来の目的である800?まで爆弾が搭載できず、艦船攻撃としては非力に近い250?の爆弾を抱えて殺到していた。

「戦艦に効果が薄い。駆逐艦や巡洋艦攻撃に変更する。」

艦爆隊は目標を駆逐艦や巡洋艦に変え、攻撃を続けた。

―ビスマルク―

「敵が盛んに無線交信を行っております。」

「馬鹿だな。それでは、自分たちの位置を知らせているようなものではないか。」

「いえ、既に攻撃を受けている模様です。」

「何だと!？」

自分たちよりもこの海域に進出している味方艦隊はいない筈だった。

「空軍か？」

「航空攻撃を受けていると言っているから、恐らくは。」

「ゲーリングめ。我々の手柄を横取りする積りか。」

「しかし、戦艦は沈んでおりません。それを沈めれば、巡洋艦や駆逐艦なんぞ、空軍に渡してやればいいでしょう。」

「やはり、航空機で戦艦は沈められんか。」

まだ、この時代では戦艦が世界の海を支配していると思われる。航空機が世界の海を支配すると考えているのは、航空隊と一部の海軍関係者のみである。

「捉えたぞ。」

航空攻撃が終わり、見るも無残な状態なイギリス海軍をまだ歴史の浅いドイツ海軍が捉えた。

「前方艦、フッドより砲撃開始。」

「何を馬鹿を遣っている。走りながら砲撃とは。それに、前を向いておる。フッドめ、焦りすぎて東郷の教えを忘れたのか？ そんな奴らに、世界の海を支配する権利は無い。面舵一杯！！」

東郷平八郎。日露戦争の英雄で、日本海海戦で様々な要因が重なって完勝した戦いを指揮、世界でも初の試みである斉射を採用した人物として知られる。有名な一斉大回頭の通称『東郷ターン』は有名である。

「各艦艇、面舵一杯。左舷砲戦用意！！」

右に舵を切り、戦艦群が一斉に砲塔を左に向ける。世界で再び、日露戦争の日本海海戦を再現しようとしているのだ。

「イギリスが初めは信じなかった日本海海戦の勝利、今度も貴様らは我々が勝つことを信じないだろう。」

砲塔が敵艦隊を捉えた。

「各艦、一斉砲撃はじめ！！」

全ての戦艦の主砲が一斉に放たれ、敵艦艇に向かって飛翔した。

「目標に命中3、各艦艇の連絡密にし、互いの主砲調整に心掛けよ！！」

各艦が連絡を取り合い、主砲角度を調整していく日本海海戦での戦法を採用し、攻撃を続ける。一方、イギリス海軍は先ほどの航空攻撃を受けて士気が下がっており、士気の低下は命中精度低下にも繋がる。そして、それは焦りにも繋がるのだ。

「大陸より、何かが向かってきます!!」

「何!?!」

フッドが迷走し始めたその時、ドイツ本土から何かが向かってきた。後部にはジェット噴流、弾頭には炸薬らしき物。

「あれは!?!」

「総員、何かに?まれ!!」

そのロケットはドイツ艦隊を通り越し、迷走を始めたフッドに5本が命中して沈没した。

「一体、何だったんだ?」

これを見たイギリス海軍は直ちに撤退。ドイツ艦隊も、暫くはフッドを呆然と眺めていたが、敵が居なくなったために撤退した。かくして、北海とドーバー海峡の制海権を賭けた戦いは、フッドの沈没で幕を閉じ、ドイツが制海権を獲得した。

ードイツー

「実験は成功ですね。」

大型のトラックが停車している近くに、エーベルトは居た。

「はい。」

「ワーグナー博士、これでああなたの開発した『エアロー』は採用になりました。」

世界初の対艦ミサイル『エアロー』は現在で言う自走弾道ミサイル発射基となるトラックから放たれ、遙か遠方のフッドに命中させたのだ。

「はい。航続距離はここからイギリス本土までも十分に射程圏内に収めております。？Zミサイルもあと数か月で試作一号機が発射される予定です。」

ロケット技術に道を見出したドイツ科学者は早期の研究開発とエーベルトの創設した兵器産業省の援助を受けてロケット、そしてミサイル開発を進めていた。そして、それが史実よりも早いロケットやミサイルの誕生を生み出したのだ。

「では、私はフランス侵攻を実行せねばならないので。」

既に、エーベルト指揮の第28独立機甲師団はフランス目指して移動を開始していた。エーベルトはエアローの実験を見るためにドイツへと残っていたのだ。

「1か月もかかりませんよ。フランスを落とすなんて。」

「では、それまでに？Zミサイルを完成させておきますね。」

「実験が楽しみです。」

キューベルワーゲンは走りだし、第28独立機甲師団を追いかけた。

フランス戦 1

ーランスー

「揃ったか。」

フランス東部は完全に占領され、パリを落とせばフランスは降伏しか道は残されていない。

「第28独立機甲師団の初陣、フランスのパリを落とす事となった。」

エーベルトはただだけを言った。実際、それしか言う事は無かった。軍事訓練を受けた兵にとって、戦う以外に生きる道が無いからだ。

「フランス政府に降伏勧告の文章を軍師が届けたそうですが、良い回答は得られませんでした。」

ディエ中尉が報告する。

「落とすしかない。パリを陥落させ、降伏文書を受け入れてもらうしかないな。」

全員が百も承知だった。

「乗車。急げ!!」

エーベルトが指示を出し、自ら乗車するレオパルド2へ乗り込む。

乗り心地は、前作のレオパルドと比べ物にならないほど良い。センサー類で狭い感じはするが、逆に現代になれたエーベルトはこっちの方が落ち着く。

「失礼します。」

そう言って砲手席に座った少女。この戦車の砲手である『エラ・フアウザー』独立軍少尉候補生。

「ああ。」

この少女、エーベルトには何か引かかる部分があった。軍人であることに変わりはないが、おかしいと思える事がある。そこへ、

『大将、聞こえますか？』

無線機を介してこの戦車の無線手、『ハルトムート・フォン・フツケンパイン』独立軍少尉候補生の声が聞こえてきた。ユンカー出身の貴族家系の息子。将来を約束されていたが、決められた人生を歩む気はないと言う事と、幼いころに見たヒトラーに感銘を受けた為、独立幼年学校に入学。首席卒業を果たした。

「ああ。感度良好。センサーの異常はないな？。」

『はい。』

この戦車の装備するセンサーの殆どが無線手である彼によって操作される。この戦車で、一番の重労働が無線手だろう。前方機銃から、無線操作、更にセンサーの操作を行わねばならないのだから。

操縦手は操縦に専念する。ディエ中尉が担当する事となる。砲手は自働装填装置による主砲弾装填と射撃、主砲同軸機銃を操作する。戦車長であるエーベルト大將は部隊の指揮と本車の指揮、砲塔上部機銃と砲塔後部機銃を操作せねばならなかった。

他にも、臨時の際に一名が搭乗するスペースがある。基本は衛生兵が乗るが、今回は誰も乗っていない。

「ディエ、エンジン始動。」

「了解。」

エンジンを掛ける。マイバッハガスタービン式エンジンが低い唸りを上げ、暫く車内が振動した後、その振動が治まったところで、

「バンツァー・フォー戦車前進。」

第28独立機甲師団はパリ目指して移動を開始する。随伴の歩兵部隊は再編された6000名程度の歩兵で構成されている。組織だった戦車隊が失われているフランス軍相手には十分だった。

「砲兵隊も随伴している。今回はゆっくり行くぞ。」

砲兵隊も随伴するため、進軍スピードはエーベルトにしては珍しくゆっくりだった。アルデンヌを僅か2日で突破した進軍では落伍する戦車が増えるために今回はやめた。

「ある程度整備されているから、進軍はスムーズだな。」

整備された道路網を使ってパリを目指す。

―ケールシュタインハウス―

「総統、全軍がフランス陥落を目指し、移動を開始しました。」

武装親衛隊の将校がヒトラーに報告する。

「そうか。ヒムラー長官、親衛隊を陥落後にフランスに入れ、ユダヤ人を徹底的に迫害させろ。」

「了解しました。総統。」

「ふふふ、フランス陥落後、次の目標はイギリスだ。余の目指す、ヨーロッパ帝国再建にはイギリスの屈服が必須なのだ。」

ヒトラーは自らの世界観から、欧州の全土統一を目指している。そして、その波は同盟国である日本以外のすべての国々を奴隷化させることすら躊躇わなかった。イタリアも、ムッソリーニの手腕は勝っているが、戦争指導などでは三流以下と称し、何時かはイタリアも侵略する計画を進めていた。

「全世界が余の前にひれ伏し、余は歴史上初めて世界を統一した男となるのだ。」

ヒトラーはまるで、狂気に憑りつかれたかのような発言までし始める。一体、彼が目指していたのは芸術家の筈。なのに、なぜ彼は政治家を志し、狂気なまでの行動をするようになったのか？。崩壊する世界に、希望があるとすれば、それは何なのか？。答えは今後、

明らかになっていくだろう。

フランス戦 2

進軍を続けるドイツ軍を阻める存在は無かった。

「戦車隊、敵前を突破する。」

戦車は一か所を集中火力で突破し、前線を総崩れさせる。そして、崩れた所から歩兵部隊が各個制圧。これが、ドイツ電撃戦の特徴の一つ。

「エーベルト大将、前線を突破した戦車隊が首都目指して進軍中ですが。」

「分かっている。一番乗りは第28独立機甲師団だ。」

首都へ一番乗りすると言う名誉をエーベルトは逃したくなかった。新たに創設された部隊の一番乗りが兵らの士気に吉と出るか凶と出るかは個人にもよるが、それでも一番乗りの名誉はどれにも勝る最高の名誉である。

「レオパルド2と言う最新型戦車を受領したんだ。一番乗りすれば、總統のお目も高いだろう。」

A4号線を一直線に突き進み、パリが見え始めた。

「前方にフランス軍戦車8、歩兵数名を確認。」

前方カメラが歩兵とB1戦車、S35戦車が居る。

「全く、フランス軍の無能な上層部共め。戦車の分散配置が如何に愚策か教えてやる。」

エーベルトは時代が変わり始めているのに気付かないフランス軍上層部の無能っぷりに腹が立つ。

「恨むなよ。恨むんなら、無能な上層部を恨め。」

戦車砲弾が装填され、目標へ向ける。

「戦車横隊、一斉攻撃。」

戦車が横一列に並び、一斉に140mm砲弾を敵陣地に向けて放った。

「凄いですね。」

砲手のエラが照準儀に映るフランス軍陣地の悲惨さを見る。

「エラ少尉候補生。これがレオパルド2なのだ。この戦車はこの時代ではどの戦車よりも高性能で、どんな状況下でも確実に任務を熟すために製造されている。」

（まあ、尤も。それは最悪、我々を犠牲にしてまで、味方の後退を支援するためなのだが。）

エーベルトはそう思う。大勢の味方の為なら自分は死ねるのか？それが、彼には疑問を抱かせる。

「大將殿は戦車戦を熟知しているようですが、その年で大將になれ

るんです。相当な実力だと思っていましたが、本当だったんですね。」

「そうでもない。」

そう言って、エーベルトは横にあるテレビに、前方カメラの映像を映した。

「戦車は全滅した。歩兵は後続部隊に任せろ。」

「了解しました。前進します。」

デイエがアクセルを踏み込み、進撃を開始する。歩兵は機関銃などを放ってきたが、そんな物、戦車には無力。逆に、前方機銃と戦車同軸機銃で蹴散らされた。

「ドイツ軍補給所―

「戦車隊の燃料消費は非常に高いです。今日だけで、訓練時の2か月分を使用してしまいました。」

「仕方が無かろう。戦時は平時と違う。常に激しい行動が必要になる。燃料消費量なんか、半端じゃない。」

補給将校とエーベルトは補給基地で言いあう。

「それは、分かります。しかし、大将殿。この燃料消費量では、予定の3倍は軽く超えます。」

「だったら、空軍に敵を蹴散らさせろ！！。戦闘があるから燃料消費量が激しいんだよ。何のための電撃戦だ！！」

思わず、エーベルトは強く言う。

「一応、今日は天候が今一だったので、空軍は飛ばませんでした。しかし、明日は快晴。絶好の飛行日和です。」

「だったら、空軍に叩かせろ。燃料にはあまり余裕が無いのだ。今、帝国の戦車用燃料の残量は全機甲師団が一斉に動いて3日しか持たない。これでは、この作戦に参加している全8個師団では1〜2か月だ。」

「明日は、空軍が動きます。我々は、明日にはパリへ入城。降伏勧告を行います。」

「パリは、できれば無血入城が良い。あの歴史ある都市で戦闘なんか、真っ平御免だ。」

「補給将校である、私に言われても。」

――米戦艦 ウェストバーヂニア――

「同志、チャーチル。ドイツ軍はパリ目前まで迫っているそうじゃないかね。」

ルーズベルトはチャーチルの顔を見て言う。

「はい。フランスは明日、降伏を決定しました。ダンケルクからの撤退は失敗し、1万人程度しか救うことが出来ませんでした。」

「ド・ゴール將軍が救われただけでも、感謝せねばならないな。」

「はい。」

シャルル・ド・ゴール將軍は史実とは違い、ダンケルク撤退戦で輸送艦に乗艦するも、10?ほど渡ったところでUボートの攻撃を受けて乗艦が沈没。漁船に拾われ、命からがらイギリスへ到着した。撤退場所でシャルンホルストなどの高速水上艦艇が奇襲し、振り切ったところで航空機が強襲。離れた所でUボートの奇襲と、幾多もの攻撃に耐えられた艦はごく僅かであった。

「我々も、出来る限りの援助はします。しかし、国内の厭戦気分と孤立主義のお陰で開戦できないのです。上手く、日本に戦端を開かせねばなりません。」

ルーズベルトは早く戦争が遣りたかった。そうしなければ、国内の不況が終わらない。ニューディール政策は一部が高裁で違憲と判決され、失業者もあまり変わらなかった。なので、景気回復には戦争以外の道は無かった。

「禁油措置をすれば、早いのですが。」

「しかし、ドイツは三国同盟を一時的に凍結すると言ってきた。そんな国に禁油措置をすれば、国内の親日派が黙っていません。」

ルーズベルトは杉原千畝の行っている日本へのピザのお陰で国内の

ユダヤ人や日系人などが親日感情になっているのに、この状況で禁油措置など行ったら、支持率は相当痛手を被る。

「最悪は、どんな手を使ってでも戦端を開かせねばならんな。」

ルーズベルトはもはや、どんな手を使ってでも日本がアメリカに攻撃させねばならない。

「同志、ルーズベルト。我々、イギリスは今やナイフの上に立っているようなものだ。ヒトラー率いるナチス・ドイツに勝つには、貴国の援助が何よりも必要なのです。いや、援助ではなく、戦争です。」

「同志、チャーチル。我々は、戦争をするのではなく、作るのですよ。正直、ヒトラーには感謝しなくてはなりません。我々の計画に自らが乗ってくれたのですから。」

「そうでしたな。」

二人はがっちりと握手を交わした。しかし、この様子を一隻の潜水艦が見ており、水中聴音機で二人の会話を完全に聞き取り、しかも、録音していた。

— U A 11 —

「やはり、戦争を望んだのはアメリカとイギリスか。」

ドイツのUボートの一隻がこの会話を記録していた。

「大西洋上にアメリカの戦艦が居ると思つて近づいてみれば。とてもない会談をしてやがる。」

艦長はアメリカが宣戦布告していれば、容赦なく魚雷全門を自艦の損害関係なく至近距離からぶち込んでやりたかつた。

「しかし、これでアメリカとイギリスが戦争を望んでいたって証拠になりますよ。」

航海長が艦長のもとに来て言う。

「そうだな。今日のこの事はノルウェー潜水艦隊司令部へ報告するぞ。」

ノルウェー政府降伏後に作られた潜水艦隊司令部に今日のこの会談の内容が完全に報告された。これは、ドイツにとって、最高の贈り物とも言えた。

フランス戦 3

―パリ市内―

結局、エーベルトの思惑は外れてしまった。パリには戦闘状態と言う状況で突入してしまった。空軍は朝早くから空爆でフランスの燃料集積基地を破壊し続けている。

「防空壕がある、気を付けろ。」

パリ市内の至る所に防空壕や塹壕が設置されており、戦車はそれを踏み越えて進撃する。

「3方向から突入しており、壮絶な市街戦を繰り広げているとの事。」

ハルトムート少尉候補生が伝える。

「分かった。凱旋門付近に、敵が集結中と伝えろ。」

第28独立機甲師団はレオパルド?、ティーガー?、パンター?とドイツが装備する戦車の中で最新式戦車だけを運用する、世界でも類を見ない機甲師団であった。特に少年、少女で編成された部隊では異例中の異例である。

「ルノーB1戦車が見受けられるな。S35騎兵戦車やFCM36軽戦車も見える。」

車外カメラを使って外の様子を見たエーベルトは

「弾種、徹甲。」

「了解。」

ファウザー少尉候補生は答え、自働装填装置のスイッチを押して徹甲弾を装填する。

「撃て！」

発射された徹甲弾はルノーB1の前面装甲を軽々貫通した。高々、60mm程度しか装備されていないB1が耐えろと言う方が無茶である。

「撃て！」

続いて後続部隊も砲撃。パリに主力を集め、地方が手薄。その隙に攻め込んだ部隊が居るほどだ。エーベルトはラジオのスイッチを入れる。

（パリは燃えているかが流れれば、最高なんだがな。）

ラジオは戦意高揚を呼びかける放送しかしていない。それに、エーベルトご希望の曲はまだ存在しない。

「ラジオの出力をドイツに合わせてください。」

ディエが言ってきたので、エーベルトは出力をドイツ国営放送に繋ぐ。

「繋いだが、こっちも戦意高揚の軍歌しか流していないぞ。」

ときどき、戦況報告が公表されたりするが、その殆どが過大戦果である。

「戦車中隊に分かれて戦闘しろ。固まっていたら駄目だ。」

そう言って、エーベルトは戦車中隊規模15両ほどに分かれて戦闘を開始する。

「歩兵の構築した陣地ですね。戦車もS35が居ります。」

S35が2両駐留する歩兵の機銃陣地を見つける。

「パンター？が攻撃要請です。」

「本車と共に攻撃だと伝えろ。」

連絡し、発射体制を整える。

「撃て！」

準備出来次第、直ぐに行動を起こした。弾薬を集積していたのか、小規模な爆発を起こして陣地が破壊された。

「凱旋門を占領したぞ。」

凱旋門の周辺を占領完了。これが確認され、パリ上空に輸送機が大量に到着し、空挺部隊と補給物資を投下された。中でも、面倒なのが空挺部隊の存在である。彼らは絶妙なところを狙って降下し、数

少ない戦力で占領してしまう。

「正直、あれをもっと訓練して最終的には完璧に熟さなくてはならない。」

「エーベルト大将、フランスの降伏は目前。貴官隊には救援の戦車数両を受領させる。」

更に、ドイツは占領されている地域の列車網を繋げたりと勝手な事をしてヨーロッパ全土に列車が広がって行った。そのお陰で、列車砲を始め、火砲から武器や戦車を迅速に陸揚げ可能である。

「フランスに、戦車はもう無い。」

エーベルトは、そう確信した。軍師によって幾度となくフランス政府と交渉、1週間が過ぎ、反乱兵力が少しずつ弱め、フランスはついに降伏した。

長きにわたる損害は激しく、特に歩兵の損害はドイツとしては大きかった。しかし、これから始まるうとしている空の戦いに陸は関係ない。その間に兵力を元に戻すように薦められていった。

秘密結社

―パリ 郊外―

ここには、第一次大戦でドイツの敗北を決定付かせた1918年の休戦協定調印式で使われた客車を運ばせ、設置されていた。

「ジーク・ハイル。ジーク・ハイル。」

武装親衛隊の整列の許、ヒトラー総統を始め、各軍司令官とナチス党高官等が訪れた。

「総統閣下、客車内にはカメラを設置しております。」

ヒトラーの隣を歩くゲッベルス宣伝相は、ヒトラーに小声で耳打ちする。

「そうか。イギリスの豚共に、最高の屈辱を味あわせてやろう。第一次大戦で、我々を降伏に追い込んだこの客車で、今度は連中が降伏に追い込まれるのだ。」

歩きながら、ヒトラーはそう言った。

「では、総統閣下、もうじき、フランス側の代表団が到着します。譲歩はいけませんぞ。」

「無論だ、ゲッベルス博士。」

―パリ市内―

「派手に、破壊されたな。」

パリを戦車で視回るエーベルトとその乗車員は、破壊されたパリ市内を見る。

「あの、華の都の面影は何もないわね。」

砲塔の上に座るエラは、パリがまだ、華の都と言われていた時代を夢見ていたのだ。

「ファウザー少尉、お願いですから無線アンテナの所に座らないで下さい。電波が乱れて、聞き取りにくいです。」

無線手席に座るハルトムート少尉が、砲塔に設置されている無線アンテナの所に座るエラに向かって注意する。

「うるさいわね。戦闘が終わったんだから、少しはのんびりさせてよ。」

「戦闘が終わっても、戦争は終わってませんよ。」

「うるさい、うるさい。フランスが降伏したんだから、少なくとも私たちの任務は一時終わったの。」

「エラ少尉、次はイギリスがある。」

聞いていたエーベルトはエラに言う。

「分かってます、エーベルト大将。しかし、大将自ら前線で指揮しなくとも。」

「言ってなかったか？私は前線で部下と共に死戦を乗り越えなくてはならない。そうしなくては、指揮官は信用されない。」

「もう、十分この部隊は大将を信用しておりますよ。」

「そうか。しかし前線に立たねば、分からない事がある。私は、第一次大戦に従軍して多くの死者を見た。それはドイツ軍司令部が把握していたよりも甚大な数に上っていたことも知っている。」

タイムスリップした。というかせられた。この戦車の運転席に座るディエ中尉によって。そして、そのタイムスリップした第一世界大戦はエーベルトも歴史で習っていた。前線を甘く見る指揮官、それによる多くの犠牲。だから、エーベルトは最前線で指揮を執っていたのだ。

「私も、歴史の授業で習いました。熾烈で長期化する塹壕戦。たびたび流れる突撃を命じる合図。そして、突撃する兵をなぎ倒す機銃音。それが、たった一つの兵器によって戦線が崩壊したことも知っています。」

「この、戦車の事か？」

ソムの戦いでイギリスは硬直する塹壕戦を一気に片付けようと、史上初の戦車『マーク戦車』を投入。それは、戦車を知らないドイツ軍を混乱させ、塹壕を突破。奥地まで攻め込んだ。

「第一次大戦から、今までで戦車は大きく変わった。このレオパルド2、世界最高の性能を持つこの戦車が歴史を支配し、そして戦車の歴史を変える。」

今の戦車の形は、まずマーク戦車から始まり、続いてフランスのルノーFT17で形作られ、ドイツのパンターなどに見られる傾斜装甲が設けられて現在まで至っている。

「時代と共に、戦車も進化していくのよ。」

エラは、砲塔を撫でながら言う。

「エラ。君の言うとおり、この戦車は最高だ。如何なるものを弾き返す傾斜された装甲、如何なるものを撃ち抜く戦車砲。そして、最新技術を盛り込んだ技術。それ故に、この戦車の一台当たりの値段はレオパルド1の3台分と言う額だ。しかし、それに見合った力は持っている。」

「何だか、矛盾もある言葉だけど、この戦車が最高なのは分かった。」

エラは再び、パリ市内の景色を見始める。所々には塹壕がある為、戦車は時速30km前後で走行している。

「そろそろ、調印式が終わる頃だな。」

時計を見ながら、エーベルトは言った。

―パリ 郊外―

「では、フランスは完全にドイツの領土とする。」

史実では、一部だけフランスの自治政府（実際、自治政府とはいえないが）がヴィシーにあった（これをヴィシー政権と言う）。しかし、ヒトラーはフランスを全てドイツの領土とする事となった。

「宣戦布告を行わなければ、領土を失わずに済んだと言うのに。」

ヒトラーは最後に皮肉めいた事を口にした。フランス側の代表、ペタン元帥はその皮肉を受け止めるだけだった。

この後、客車は勝利の記念碑としてベルリンに運搬。ベルリン大聖堂広場に設置され、宣伝省のドイツ軍勝利を示す大きなプロパガンダとして使用されるのだった。

―ベルサイユ宮殿―

ここに、エーベルトはヒトラーから呼び出しを受けていたのだ。

「総統、一体どのような御用で？」

「うむ、日本は三国同盟凍結はしてくれた。しかし、ソ連侵攻はまだ早いと、そしてアメリカとの戦争は回避が難しいそうだ。」

「では、対米戦は避けられないと？」

「日本がアメリカと戦争をして、勝てると思うか？余は勝てると思う。あの国は強い。アジアで最強の国だ。3000年間、無敗を誇

っている。」

日本の有史以来、負けを確実とする戦争は大東亜戦争を除き、存在しないのは事実であった。

「しかし、幾らなんでも国力が違いすぎます。」

「分かっておる。だが、三国同盟の凍結は好都合だ。アメリカとイギリスの会談を傍受できてな、アメリカが我々へ宣戦布告の用意を整えている。」

（やはりか。）

エーベルトはアメリカがこの戦争を裏で仕組んだのが分かっていた。ドイツの第一次世界大戦終結後から第二次大戦開戦まで所々でアメリカの影が存在している事に気付いたのだ。

「総統、困りますな。こんな所へ人を呼んでは。」

エーベルトの背後から声が聞こえ、振り返ると。

「構わんよ。彼は国防軍の中では信用に足る人間だ。」

「総統、我々の計画を明るみに出しては困ります。」

しかし、ヒトラーは無視をして

「紹介するよエーベルト君。彼は秘密結社『赤い鎌』の代表、ハンディエル・ムーア君だ。」

「そ、總統。」

「良いではないかハンディエル君。彼は信用できる男だと言っただろう。」

ハンディエルは慌てて訂正しようとするが、ヒトラーに止められる。

「彼は、我がドイツの技術開拓を依頼している。彼らの技術力は素晴らしい。私は、理論は知らないが反重力エンジンなるものを開発し、それを装備した円盤兵器を開発中だそうだ。」

「總統、それは極秘中の極秘です。他言無用と言っておいた筈です。」

「何度も言うが、彼は信用できる人間だ。私の目に、狂いはない。ゲーリングやヒムラーのような何時裏切るか分からん連中なんかよりも信用できる。」

実際、ヒムラーもゲーリングもドイツの敗北が確実化すると次第にヒトラーに対する裏切り行為を起こす。

「信用できるかもしれませんが、我々の存在を明るみに出さないで下さい。」

ハンディエルは再び訂正しようとするが、ヒトラーはまたも無視して

「エーベルト君、日本へ行ってもらえないだろうか？」

「え？」

「そこで、数人の者に会ってもらいたい。リップントロップを通じて話をつけてきている。ポツダム飛行場から満州の新京飛行場まで向かい、大連港から日本へ渡ってもらいたい。」

「日本へ直接行かないですね。」

「日本との同盟を凍結しておるのだ。直接行けるわけあるまい。国際的認可を受けていないが、満州国は一応の独立自治区だ。行っても、大して問題にはならない。」

「わ、分かりました。」

そう言い、エーベルトはベルサイユ宮殿を後にし、ベルリン・ポツダム飛行場を目指して待機していた車を走らせたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3528v/>

異説、ドイツ栄光の階段

2011年10月18日18時53分発行